

A S S B

(オルタナティヴ・システムズ・スタディ・プレティン)

第2巻第5号 (1995年2月1日発行)

目次

- | | |
|---|------|
| 1. 精神医学の現場から
<i>BORDER/LINE (19)</i> | 平野 啓 |
| 2. <i>BORDER/LINE (20)</i> | 平野 啓 |
| 3. 問主体態の論理 (1) | 安藤一夫 |
| 4. 千里山生協試論 | 安藤一夫 |
-

編集人 安藤一夫

発行所 ASSB編集委員会
京都市左京区田中門前町42 共生舎

会費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万円

会費振込先 (郵便振替) (口座名) 資本論研究会

(口座番号) 京都9-67283

01090-5-67283 (当分の間上記旧番号も可)

家族

1. 老婦人が、息子と共に来院した。内科医から「喋るのが止まらないので診てください」と依頼されたのである。内科では、心不全でずっとかかっていた。骨粗鬆症のために(?)歩かず、全身が痛み、特に腰痛がひどいという。彼女は歩行不能のために何故歩けないのか分からなかった。車椅子で入室し、全身の痛み、腰痛のひどさ、食欲のなさ、不眠を訴え、誰も相手にしてくれん、死んだ方がよい、ほかってくれ、といいながら一方ではとにかく入院させて欲しい、この痛みをとってくれと懇願するのだった。病歴や生活歴を尋ねようとしても耳を貸さず、入院の懇願と自分の苦しさを繰り返して訴え続ける。息子さんに聞くと、ずっと一人暮らしだったが、5年前に夫を肺癌で亡くした後、しばらく同居させていたが嫁とうまくいかず、再び一人暮らしに戻ったのだが、朝晩電話で呼び出され、体の不調を訴えられるのでどうしていいか困っているとのことだった。内科医は痛みの原因になるような事態はないといい、骨粗鬆症でもこんな痛みはないという。たぶんヒステリー性の疼痛と麻痺であると考えた。こうした患者を入院させると、大変なことになると直観したので(事実大変なことになったがそれは後述)、効かないと分かっている薬を処方して丁寧にお引き取り願った。

翌日、依頼者の内科医から、又彼女がきて入院を頼まれたので、とりあえず入院させたがあとはよろしくと言われた。内科医は当面の要求をかなえてあげれば落ち着くだろうと考えたようだ。当方は全く別のことを考えていたが、君子危うきに近寄らずの原則でなるべくかわらないようにしようと思った。頭部のCTで脳萎縮の所見があり、認知能力が低下していることを示唆していた。その他の内科的所見は正常だった。入院第1夜からトラブルが始まった。食事は全部食べられるので、当然点滴などはいらない。しかし彼女はこんなに痛いのに点滴を何故してくれないのかと看護婦に詰め寄り、わたしはわからなかった、なんで他の人と同じように点滴してくれのだと泣いてせかむ。というわけで一夜が明け、看護婦から事情を聞いた例の内科医が、あまりわかまを言っはいかんと注意した。というより叱ったのである。その場はそれで収まったが、その夜彼女は、主治医を呼べ、差し違えて死んでやる、と大声で叫び続けた。これが三日三晩続いた。同じ部屋の患者は寝不足で機嫌が悪くなり、発熱する患者もでた。内科医からどうにかしてくれと頼まれたが、普通ヒステリーの患者さんはフロイト以来外来でフォローすることと相場が決まっている。なぜなら、彼らの依存心は入院することで満足させられるが、一方で要求は際限無く高まるからである。

彼女は家族にも見放されていた。地域でも同様だった。昔から自分のことしか言わない、子供たちや自分の自慢話しかせず、そうでないときは自分の体の不調ばかりを述べたてるので、近隣の人達は次第に足が遠のいていた。息子の嫁も同様に対応するのですくに別居となった。嫁さんに電話で精神安定剤を使うがこの年では危険が大きい、それでもよいか、あるいは精神科病院への転院が必要になるかもしれないが、と尋ねると、好きなようにやってくださいと言われてしまった。内科医にも、好きなようにしてくれと引導を渡された。死んでも構わんとまで言われた。医師は誰のために仕事をするのだろうか。患者のためか、患者のために迷惑をこうむっている周囲の人のためか。

当面、痴呆病院に連絡してそこが空くまでここで面倒を見るよりし方がなかった。抗鬱

剤を使用した。全然効果がなかった。この薬は譫妄状態に特効性のある著明な鎮静作用を持つ。われわれが飲めば二日間はふらつくだろう。しかし彼女は相変わらず「元気」で主治医を呼べと繰り返していた。そこで一段と強い鎮静剤を使用した。精神分裂病で不眠が強いときに使用するものである。二日目に薬が効きすぎて日中の食事がとれなくなった。始めて点滴が開始され、心電図でのモニターが開始された。三日目の昼、心電図の警報がなった。フラットである(つまり心停止)看護婦が病室に駆けつけると嫁さんが編み物をしていて、事態を告げ、形ばかりの蘇生を試み死亡の確認がされた。この時は内科医が立会い、当方は不在だったが、家族は思わず「よかった、よかった」といって看護婦にたしなめられたという。内科医も、後で「あの時は笑いがこみ上げてきてしかたがなかった」と言っていた。誰も悲しまなかった。

病院では、緩慢な殺人が日常茶飯事に行われていることは現場にいる人なら誰でも知っている。時折新聞を賑わす医療過誤などの事件は大抵は内部告発によるものだ。家族も看護婦も暗黙のうちに了解できるような医師の裁量には文句はでない。その医師の日頃の行いがパラメディカルや他の職員の敵意や不信を招いていると、あるきっかけでその医師は告発される。モルヒネが命を縮めることは誰でも知っている。しかし、末期の癌の患者さんの疼痛を緩和するために内科医はモルヒネ使用をためらうことはない。しかし、その使用を告発しようとする人は少ないだろう。結局どの医師でも同じようなリスクのある治療をしているのだが、彼が殺人者として告発されるか、「きれいな」死に方をさせてくれたという感謝されるかどうかは、彼の日頃の行いに左右される、ということである。

2. ある肺癌の男性に病名を告知したので、そのあとに予期される精神不安定を含めて、フォローしてくれるように内科医に頼まれた。彼は大学病院で前癌状態だと告げられて、化学療法や放射線療法を受けていたが、副作用がひどい上に、インフォームド・コンセント不足のためにその大学病院から転院してきたということだった。確かにそれと理由の一部ではあったが、本当は家族の希望が大きかった。彼は大学病院に入院中、愛人に付き添わせて、家族には入院をふせていた。愛人が付き添っていると分かったときに、妻と親は彼女を切り離そうとしたのである。

転院直後、主治医は病名を告げ、治療プランを告げ、納得の上で化学療法を再開した。副作用の訴えは見られず、表面上は元気に振舞っていた。転院の時に愛人のことは聞いていたが、妻は彼女との関係が又はじまることを恐れて、外泊や外出について困っていた。医師は肺癌の治療については責任をもつが、彼の私的行動を制限する権利はないからである。妻はできれば医師の方から愛人宅への外出は控えるようにとお願いしたかったのだろうと思うが、それは権利上も、実際にも不可能である。彼はある会社の社長であるが、その会社は倒産寸前になっていた。親がその後始末に奔走していた。病室に訪問しても滅多に会えなかった。彼はしょっちゅう愛人と携帯電話で連絡し、夜は大体1時頃まで病室に戻らない。週末の外泊先は愛人宅である。

化学療法も半ばを迎えた月曜の朝、彼のいる病棟から呼出が来た。彼と妻が喧嘩しているのですぐ来てくれという。月曜日ほどの科も外来が忙しい。内科の主治医も外来の当番で来れないという。こちらも外来患者をかかえてどうすべきか迷ったが、結局、他の医師に外来を頼んで病棟に行くことになった。喧嘩の原因は彼が愛人を病棟まで連れてきたので、妻が帰ってくれと頼んだことらしい。

最初は、妻と彼と一緒に話して、当院に入院中は妻が付き添うという最初の合意に基づき、今後は彼女には病院に来てもらわないということになった。今度はそれを愛人に納得してもらわなければならない。それで彼と愛人を一緒に呼んでその説明をしようとしたら、彼女は、そんな合意は一方的で私は知らないことだと主張した。いわれてみればそのとおりである。しかし、問題はいったん先の約束をした本人が態度を変えて、私の精進衛生を本当に考えてくれるのだったら、なぜ彼女と一緒にしてくれないのだ、と言い始めたことだった。全部帰出に戻ったと思ったので、当事者で話をつけてもらうことにし、一旦は場を離れた。外来を済ませ、午後病棟に戻ると主治医をかこんで当事者がまた話し込んでいた。彼は俺の体だから俺の好きにさせてくれ、妻とも退院後は離婚するつもりだから、来てもらう必要はない、俺は彼女(愛人)に付き添ってもらおう、という主張を曲げなかった。主治医が、それでは緊急時に連絡する先はどこにしたらよいかとたづねると、妻には連絡してもらわなくてよい、と言われた。緊急時の連絡先をどこにするかは法律上も手続き上も重要である。そうした配慮は彼の頭になかった。私が主治医であれば、彼を一旦退院させていただこうが、主治医が内科医であるのでまるくおさめようとして彼の案をのんだ。妻は泣いていた。妻は一切の日用品を持ち帰ってしまったので彼はその後二三日、困っていた。医局で、主治医の内科医が言った。患者は医者を選ぶ権利があるというが、医者だって患者を選ぶ権利があると、珍しく感情を昂らせていた。僕が主治医だったら、約束違反ということで退院してもらいますかね、と言ったら、精神科の先生に遠慮してどならなかったのだと言われた。ということはあの場で医師同士が遠慮しあっていたのだ。

シニカルで知られる腎臓科医が口を挟んできた。退院させればよかったのに、と。主治医は、いやちゃんと治療すれば一年は生きられる、と答え、腎臓科医は、そんな誤差範囲、医者のマスタベーションだと言った。どうせ死ぬんだったら好きな女と好きなことさせればいい、と。この論争に答えない。ともあれ、その後、彼を診察しなかった。というか診察しようという気持ちが起こらなかった。

3. 精神科の外来では、患者さんよりも家族を問題にした方がよいと感ずることが多い。しかし、残念ながら最初に事情が分かることは少ない。20才の未婚女性が両親に連れられてきた。彼女は右足が不自由らしく、松葉杖を使っていた。最初脳外科にいったのだが、脳外科医が当方に照会してきたのである。脳外科にいった理由は「頭ががちゃがちゃする」という彼女自身の訴えによるものである。この自覚症状は長年にわたっており、両親は多くの病院に彼女を連れていったのだ。精神科にももちろんいったが、薬を渡されただけだったので通院しなかった。その時、実は両親も心理テストをされ、父親によると、本人よりも母親の方に問題があると言われた、ということだった。逆に母親によると、父親の暴力によって本人の性格が曲がってしまったということである。

しかし、例の「頭のがちゃがちゃ」については、両親・本人とも、脳の異常例えば脳腫瘍によるものと確言していて、どの病院にいったも脳外科の手術はできないか、と頼むのだった。彼女は知的障害があり、あまりうまく言語的に自己表現できない。多分心理的な要素が多いと考え、家族生活だけでは苦しかろうと思い、テイケアを勧めた。

本人も家族も歓迎してくれた。しかし、テイケアに通ううちに色々なことが明らかになってきた。「なんでも、時間が立てばはっきりしますぜ」(「ドンキホーテ」より、サンチョ・パンサの言葉) まず、右足の不自由であるが、買い物をしているとき、誰に霧

中になっているとき、みんなでかけっこをしたりして遊ぶときは普通の歩行ができるばかりか、走ることもできるようになった。料理の時間には、ほとんど何もできなかった。包丁の使い方も分からなかった。彼女のレベルの知的障害ならば、教えれば十分できることである。もっと基本的なこと、例えば、料理の前には手を洗うことも彼女はしなかった。爪は伸び放題、頭は一カ月に一度洗うだけだった。何故、頭を洗わないのかと尋ねると、「頭のがちゃがちゃ」がひどくなるからという。

母親に幼時からのトレーニングを尋ねると、十分にやったつもりである、そんなにできないとは思っていません、といわれるのでこれからは一緒に全身の清潔の問題などを考えていきましょう、と提案するより仕方がなかった。

ある時、彼女が帰りの電車の駅で失神したことがある。テイケアでは元気だったので誰も前兆は分からなかった。母親が駅長から連絡を受けて迎えにいった後、母親から電話があり、テイケアの担当者の責任を厳しく追及された。前兆がはっきりしている場合を除いては、ある病気や発作の予測をすることは不可能である。それが母親には理解できないようだ。それで、この事件以降、当時失職中だった父親に送り迎えを頼むことにした。

彼女は色々な身体症状を訴え、腹が痛いといっは内科にかかり、耳が痛いといっは耳鼻科にかかった。内科医は親切にもあらゆる検査をしてくれる(デフェンシブ・メディシンといっは、医療届出が起ったときのことを想定して考える全ての検査をしておくのが主要な傾向である)ので、内科にかかったときは少なくとも一カ月はテイケアはおやすみである。診察結果は大抵、便秘、軽い腸炎のレベルである。

ある日、父親の都合が悪く、本人が自分でバスにのってテイケアに来ようとした日があった。バスから降りるときに、閉まろうとするドアに足を挟まれた(と彼女はいう)。母親がそれを聞いて駆けつけ、市の責任を追及する結果となった。それ以降、再び彼女は歩行不自由となり、約一カ月自宅で静養した後、テイケアに復帰した。ところが歩行を注意して見ると、例えば、階段を上がるときには松葉杖を使わない、患側ではなく、健側をかまようような松葉杖の使い方をする。診察後、そのまま立って帰ろうとするので、松葉杖を忘れたよというとおわてて取りに戻ってくる。母親は古くからの整形外科医に通わせていたが、テイケアでの動作を詳細に分析すれば、あきらかにヒステリー性の歩行困難であることが分かる。

これまでの経過を総括して、両親と方針を再検討することに決めた。テイケアでいくら自立を援助しても、家族がかまひすぎの傾向があれば一貫した援助効果はつくれない。病院での彼女の行動を見たまま話した。特に足の事故の後遺症をどう見るかという点についてである。母親は彼女が歩けるようになったのは古くから通っている整形外科医の漢方薬のおかげであると確言していた。それならばなぜ、ある時、突然歩けず、別のときに歩けなくなるのか、説明がつかない。その点をどう見るかと母親に尋ねると、父親が鞆から「要するに心因性ということですね」と言われた。すると母親は、夫はなんでも心因性といえよという気になっている。大体この子が病気になるのは夫の暴力のためであって私一人で苦労して育ててきた。夫は何もせず、無関心だった、と言い、夫婦喧嘩となった。收拾がつかなくなり、患者本人が両親のなだめ役にまわるはめとなった。とりあえずお母さん自身が悩んでみえることを率直に話せる場所が必要なようですね、と結論して知合いの診療所を紹介した。もちろん両親の問題が片付くまではテイケアはお休みです、という条件をつけて。紹介状は、また外来の受付に置いてある。永久に現れないだろう受取

人を待っている。患者本人は自宅を手伝いをしているそうだ。時々デイケアで知合いになった他の患者さんと交際しているという。その話によると私が障害者を差別しているようだ。

4. 精神障害者の家族会は各地にあり、色々な活動をしているが、精神病院に入院中の本人が老齢化する傾向にあわせて、家族も老齢化する傾向にある。ある保健所で例年開いている家族の懇談会につき合って約十年になる。参加者も固定化したり、逝かれる人も多い。ある年、寡黙な父親が珍しく発露した。彼の長男は精神病院に入院して二十年になる。父親はもう長く長男にあってはいない。会っても何かおまけの分からないことをいうだけだから、会いに行っても仕方がないと思っていけないのだという。しかし、全く無関心というわけではない。あらゆる努力をしてきたと言われる。例えば、家の方角が悪いと言われて家を改築したり、神様に願をかけた。今年は友人から、どんな精神病でも直すという神社のG氏の著書を借りてきて感動し、東北にあるその神社にいつか来たという。妻と二人のその旅行は初めての遠くへの旅だった。しかし、降りる駅を間違えて予約の時間間に合わなかった。神社では、予約を取り直して又来てくださいと言われた。そこで名所巡りをしながら帰った。二回目は予約に間に合った。G氏が現れ、何とて、一種の瞑想状態でしばらく過ぎた。その後、両親に向かて言うには、二代前の祖先が事故か災難で死亡したのだが、その祖先は自分が死んだことを知らず、さ迷っている。病人を直すにはこの祖先の霊が本来の場所に行くように祈禱しなければならぬということだ。そして、死んだことを知らない祖先は一人だけでなく、大勢なのだが、一回の祈禱で一人づつしか、あの世に送ってあげられない。さしあたり今日はその一人だけを送ることにする。とて祈禱を始めた。神社から戻り、思い出せるかぎりの親戚の死亡について調べたら、父の兄方にあたる親戚の一人が戦争中に戦艦のついでに爆撃され、死亡したがその遺体がまだ見つからないことが分かった。それで父親は、この人物のことをG氏に言っていたのだと確信し、何という靈感の持主だろうか改めて感心した。三回目に行く、更に遡った祖先の事をG氏は「見た」という。それで又祈禱をする。こうなると、時代が遡り、不幸な目にあった祖先のことを調べるすべがない。役所の戸籍課にいつか調べるだれは調べた。更に寺にいつか資料をあつた。確かな事は分からないが、どうも明治時代に祖先の一人が氷難事故にあつて死亡したらしい。

というわけで両親の神社詣では今も続いているというわけである。両親の確信を高めたのは祈禱の効き目があつたかどうかを確かめにしばらくぶりに入院中の息子を訪ねたら、話が少しできるようになった、という事実だった。

ドイツの精神医学が輸入されたのは明治初期である。ドイツから精神科医がやってきて最初に講演したのは、現在の警察庁にあたる内務省だった。治安政策として導入されたのである。我々はその遺産を受け継ぐものであり、今あげた両親の行動を笑う立場はいない。沖縄でも独特の宗教があり、ユタと呼ばれる女性が信仰されている。その宗教を理解しなければ、沖縄では精神科医としてやれない。ユタと精神科医は幸い共存共栄である。ユタのところには病人の親族が薬は飲んだ方がよいか、入院させた方がよいかなどの判断を求めに来る。大抵ノロはだされた薬は飲みなさいという。しかし、入院中の患者の枕の下から抜き身の刀が出てきたときには驚いた。ユタの指示どおし家族は言うが、丁寧に刀を返した。こういう時は困ってしまう。更に精神病で通院治療中の患者さんに祈禱を受けさせ

る家族がいる。祈禱は非常に強力な作用があるので精神的に弱い人が急速に精神病を発症することもあり、大抵、狐や、猫や、死人が憑いたとて恐怖に陥る。治療中の患者さんの家族が薬をもすがら思いで祈禱にいかれる気持ちは分かるので、何も言えないが、時に状態が悪化して収拾できなくなることもある。

輸血を拒否する宗教を信仰する家族の場合、子供が、例えば、交通事故で意識不明となり、輸血が可及的速やかに必要とされるのに家族が拒んで死亡にいたることがある。この宗教が輸血を拒否するのは合理的な面もある。なぜなら、輸血を本当に必要としないのに、輸血するケースが多いからである。しかしながら、輸血の絶対的適応の患者のケースでしかも本人の同意が確認できないときは医師は困ってしまう。二年前、小児科病棟で、母親が輸血しない方法で助けてくれと、小児科医に頼んでいたのを見たが、当の本人は出血多量で昏睡状態だった。鬱病の若い女性を援助した結果、結婚できるまでに回復したが、彼女はこの宗教の信仰者だった。彼女にリビング・ウィルを書くのを手伝ってくれと頼まれた。つまり、輸血が必要な事態が生じてても輸血を拒否するという内容の文章に署名してほしいということである。このような方法をとっておけば、医師も困らないと思う。

余談だが、最近またリビング・ウィルを書くのを手伝ってくれと女性に頼まれた。彼女は歯科医で抜歯をしてもらいに行き、麻酔中に手の感覚がなくなったので抜歯が中止になったのだが、その後痛みが強く、他の歯科医に行ったところ麻酔部位が腫れているということで抗生物質を服薬したのだが、最初の歯科医から電話を受け、是非診察したいので来てほしいと頼まれ、断りきれずに赴いたら、腫れなどはないと一蹴されたのである。その後、痛みの部位が口から肩、さらに前腕と足まで広がり、開口困難となったので、口腔外科に行ったところ、下顎骨の位置がずれているといわれ、手術目的で入院となった。しかし、一時的な軽快後、さらに痛みと跛行がひどくなったので今度は脳外科に行き、諸検査を受けたが、異状所見がなく、脳外科医は抗不安薬を出して様子を見ていたが、ある時、主治医ではない脳外科医の診察で精神科に行くように勧められた。彼女によれば、自分の症状は小脳出血によるものなのに、何故、脳外科医は腰椎穿刺をしてくれないのか、なぜ必要な検査をしてくれないのかと言う。小脳出血だという彼女の確信は医学書からの知識によるものだった。医師の臨牀的分析を受け付ける状態ではなかったものであり、唯々頼れるのは医学書だった。3時間話し合いを続け、見解の相違を残したまま知合いの精神科有末クリニックへの休息入院を依頼し、依頼状を渡した。その翌日、脳外科の主治医から心身症だといわれ、激怒した。その夜救急で来院して注射一本で帰されたが、実は病棟のリビング・ルームで一晩を明かしたのだった。一日おいて彼女が夕方精神科の外来に来て話したいことがあるという。こちらの解釈を少し受け入れてくれたように思ったが、相変わらず脳病変の存在にはこだわっており、「私が意識不明で助からないと解ったときには延命治療をしてほしくない」ので、リビング・ウィルを書いておきたいという。素直に応じて書くのを手伝い、カルテの一面に貼り付けた。精神科クリニックへの依頼状を返すというので、辛いことが起こるかもしれないから、持っていたらとアドバイスした。その後、そのクリニックから彼女が入院したというファックスが入った。しかしそのクリニックで、相当のトラブルを起こし、某精神病院に照会入院となった。その入院の際、本人は個室を希望したらしいが、あいにく明いている部屋が二人部屋であり、その部屋に入院させたのは、約束違反であり、友人のクリニックを照会した私に対して、クリ

ニックからその病院に行ったタクシー代金の1万二千円を払えと電話で要求された。断ると、市長に訴えるというので好きなようにと答えたら、本当に市長の部屋に行って秘書の制止も聞かず、怒りをぶつけたようだ。その後、又当院の脳外科にかかり、MRIの写真を医師から示されたのに、その写真を見て、「ここに確かに出血しているではないですか、なぜ嘘を言うのか」とその医師に迫り、怒って帰って行ったが、次には整形外科に行き、ヘルニアの疑いであるからきちんと診断してほしいと言う。単なる腰痛症であったが、親切にも整形外科医はサポーターを巻いてあげた。本人は今や、自分は重病で死にかけているという妄想的確信にとりつかれ、病院から離れることが不可能になった。そして当院の救急に毎日きて、そのまま病棟のデイルームで寝る日々が続いた。ある日、他の精神病院を受診して、若い親切な医師が長時間説得して個室に入院したが、あいにく行動制限しない病室だったので、夜離院して他の精神病院に行き、前の病院の待遇の悪さを非難して、結局、又当院の脳外科に戻ってきた。これ以上マイペースの行動を放置できないので、両親を呼び、妄想病である事を告げ、行動制限できる病院でなければ対応できないと告げた。妄想病は、精神分裂病とは違い、非常に攻撃的になる場合があり、場合によっては他人に危害を及ぼす。両親の納得を得た上で、もよりの精神病院に事情を告げ、本人を連れて行ってもらった。これで一見着落着かと思ったら、二日目に又脳外科を受診している。こういう場合、本人の受診の権利と行動制限の必要性の間のバランスをどうとるかということが法的・医学的課題となる。しかし、この行動パターンを繰り返していると、最近東京で起こった医師殺人事件に似たようなトラブルを起こす可能性が高い。東京の医師の殺人事件は報道で知っただけなので、詳細は分からないが、手術後、体内に異物感が増したとか、社会に対する挑発的態度を見ると、妄想病の可能性があり、関係のない他人を巻き込む恐れがあり、私のかかわった今のケースでは、私か、脳外科医が訴えられたり、直接攻撃される将来の可能性が高い。

5. Kクリニックは「母源病」説を提唱して、登校拒否とか、発達障害の子供を扱っている有名な病院である。ある23才の男性は、家に引き籠って何もしないという理由で、家人によってKクリニックに連れて行かれた。そこで直ちに入院となり、脳波の異常を指摘されて色々な薬物をのまされた末に、治らないと宣告されて放り出された。

脳波の異常がどのような性格なのかは本人も家人も知らされなかったので、当院の脳外科に脳波の再検を求めて来られた。脳外科医は直ちに当科を照会した。薬は抗てんかん薬だったが、どのような臨床所見に基づいて投薬されたのか理解できなかった。脳波ではっきり判別できるのは、てんかん、広範な脳機能低下ぐらいなものであるが、注意しなければならないのは、脳機能低下が局所的である場合、あるいは臨床的に明らかでないてんかんであると診断されても脳波が正常な場合があり、逆に、脳波異常があっても何の臨床所見もない人(特に幼少か青年)があるということである。要するに間接的な臨床検査法は、診断を正確にする裏付けにはなれるが、診断の基礎としてかわれない。CT、PET、SPECT、等、画像診断技術は非常に発達したが、それでも診断の基礎が、人間の行動の性状の観察であるという規定に変わりはない。その基本を忘れれば、人は医学に必要以上の、あるいは誤った期待を寄せる事になる。自分の脳が「正常」か「異常」かを判定してもらうために「脳ドック」に殺到し、骨が「正常」か「異常」かを判定してもらうために「骨ドック」に殺到する。しかし、ここでの正常か異常かの判定は恣意的なものであり、統計学的な妥当性に裏付けられているとも思えない。更に、脳が「異常」ならば、どうするのか。

遠方からわざわざ当院に来られた人に、何故遠くから、と聞くと、いい機械があるからと答えられる場合が多く、がっかりさせられることがある。今や病院のステータスは、医師の良し悪しでなく、「最新機械をもっているかどうかで決まるのである。

さて、例の青年は現在、父親から寿司屋の設備とスタッフをあてがわれてもらっているが、自分では働こうとせず、昼ごろおきて店の様子を見るだけである。これではしめしがつかない。話を聞くと父親はいつも本人の欲しいものはなんでも買ってやったという。例えば、60万の外国製のマウンテンバイク、何個かの高価なオーディオ・セット、豪華な部屋、等。それが愛情の表現だったらいい。しかし、これでは自発性は育たないことは誰でも分かる。父親は友人にも過保護だと指摘されていたらしいが、その結果がこのような重大な社会的結末を招くとは予想していなかったようだ。父親は、育て直しが必要だが、そのためにはこれまでの倍の日時が必要だろうと答えた。その根拠は、発達未熟に加えて、現在彼は、同年代の青年と自分を比較してますます劣等感に陥り、引き籠ってしまうという悪循環が成立しやすい状況にあるから。彼に、今何がしたいかと聞くと、寿司屋はいやだ、牧場をやりたいという。わがままなのか、父親のまえでは言えなかった本音なのかは分からない。ともかく、父親は牧場を求めて北海道に彼と共に旅だった。その後音沙汰はないが、生涯苦労すると思われる。

Kクリニックは、もともと登校拒否の子供を扱うことが多いのだが、まず大抵、母親の育児を責められるので、自殺してしまう母親もいる。その次には、登校拒否をしている本人に、このまま学校に行かないと社会で廃人になると脅したり、入院させたりする。何故、入院が必要なのか分からない。Kクリニックではないが、ある大学病院にかかった登校拒否の子供が、家から遠く離れた農村の精神病院に大学から照会されて強制入院させられて、数カ月ぶりの外出の時に自殺を試み、当院の救急に運ばれたこともある。

中学三年の男子がKクリニックに通院していたが、家庭内暴力が激しくなったというので当科を受診された。本人の言い分では、自分がこのようになったのは親の責任である。高校に進学したいので勉強しなければならぬが、勉強できなくて、つい親に当たり散らし、どうしてくれると難詰する。親はKクリニックでしっかり負目を自覚させられたので返す言葉がない。十分話しを聞いた後、「あなたか親を恨む気持ちは十分理解できるし、そのことで親を恨むのも理解できる。しかし、あなたの人生はこれからどうするつもりなのか」と聞いた。そういう質問はKクリニックでされなかったので、彼は一瞬とまどったが、それを親に聞きたいと言うのだった。「それでは、今まで通り親のいいなりになって一生を送ることになり、いままでと同じ思考パターンではないか」と問うた。かくして数時間こわたる議論の後、おやに対する気持ちと、自分の人生設計の問題は分けて考えるように試みるということで最初のセッションは終わった。数セッションの後、自分で今後の事は考えたいということで終了したが、数年後、母親が突然来院した。彼は見事に遅れていた勉強をとり戻し、高校に入学し、留学を予定しているという。また時々、親にあたるが、それよりも甘えることの方が多くなったという。彼は近く、過去と決着をつけるために一度私にあいたいそうだ。それよりも母親が心配しているのは、彼の妹で、やはりKクリニックで、やる気のない君の一生はだめであると宣告されてから、中学校以来ずっと家にとじこもっている娘のことだった。彼女は一応兄と同じ高校の通信制に入学したが、集団生活ができず、さらに長年の引き籠りで、昼と夜が逆転した生活を送り、勉強も、長いハンディキャップのために理解できず、次第に意欲を失い、自殺寸前の精神状態になって

いるとのことだった。kクリニックで、医師に対するイメージが悪くなり、母親がさとしても頑として医者に行こうとはしなかった。母親が困惑して相対に見えたのである。こういう場合、周りが困っていることと、本人が困っていることを分けて考えた方がよい。周りは将来の諸々の問題に困って入るだろうが、案外本人は違ったことで困っていることが多い。本人の悩みは、朝起きれない事だった。それならば、それを糸口にし、その問題を解決しながら、より敏感な領域に立ち入って行くことができる。それで、朝起きれないことについて、相対の者と医師が言っているのだから、その問題に関して相談してみようと、母親から本人に勧めてもらおうことにし、ようやく本人が来てくれた。彼女は、昼夜逆転の生活と勉強の困難さ、将来の不安が絡み合ったきわめて不安定な精神状態にあった。色々な問題を一挙に解決しようとする、頭が混乱するから、まず朝起きて、夜眠れるリズムをつくらうと提案した。しかし、この提案の実施は案外むづかしい。友人もなく、将来に絶望している人間が何のために早起きしなければならないのか。ともあれ、彼女は、やってみると意欲を示したので、援助するために、ビタミン12の投与(日内リズムを修正するといわれている)、及び、朝になったら、カーテンをあけて日光に当たることを課題とした。同時に、母親は優しい家庭教師を頼んだ。二週間後、彼女は少し朝起きることができるようになった。こういう患者につき合うのに必要なのは、決して諦めない耐久力だけである。

6. 今回は、脱線しながら色々な体験を書いてみた。最終的にはこういえる。精神障害の原因は特定されておらず、遺伝説、素因説、環境説、ストレス説などがあるが、いずれも実証性に乏しい。家族は大抵生育説論者か、遺伝論者である。そこで自分を責めることが多い。家族は家族の一員が精神障害になった苦しみに加えて、自分をも苦しませる。これが一番まずい事態である。フォローアップによると、予後を規定するのは、遺伝的素因でも、育児のまずさでもなく、患者を援助する物心両面の支援態勢の性格である。このことは家族は案外知らないのだから、あらかじめ知らせておくべきである。

BOREDER/LINE 20 平野 啓

メラニー・クライン

1. メラニー・クラインは、フロイトの後、児童を対象として重要な精神分析の精神分析的な角度から説明しようとしたイギリスの精神分析医であり、英国独自の精神分析理論の一翼を形成した。ラカンにも影響を与えた一人である。ここでは、彼女が精神分析をもとにフロイトとは独自に形成した諸概念を検証して、評価してみる。

2. フロイトと対比的に彼女が強調しているのは、フロイトが想定したよりもはるかに早く、自我機能、超自我の形成がおこなわれるとしたこと、フロイトがやや思弁的に想定した「エロス・生の本能と死の本能の対立(攻撃衝動)」との対立(『快感原則の彼岸』1920)を発展させて子供の攻撃衝動に重点を置いたこと、成人以降の病理に及ぼす影響(位置)をプレ・エディプス期に求めたこと、投影(projection)と取り入れ(introjection)という防衛機構に独自の意義を与えたことなどである。

精神分析的研究の最も重要な貢献の一つは、個人の良心の発達の基盤である精神分析史を発見したことであった。フロイトの発見に従えば、個人の良心はその人の両親との早期の関係の沈黙物乃至は、名代という事になっている。ひとは、ある意味では、その両親を内面化する-自分自身のなかに取り入れるのである。そこで取り入れられたものは、自我とは区別され、部分超自我(ego)となり、自我の残りの部分に対して要求、非難、警告を行い、本能的衝動とは対立的な働きを持つようになる。幼い子供の分析過程で、子供の超自我形成の基盤について直接知り始めるにつれて、私はいくつかの方向でフロイト理論を拡大できそうないくつかの事実に出会うようになった。これまでの見解では、エディプス・コンプレックスが静まるまで、-すなわち5歳頃まで、超自我が活動し始めないというのであるが、私の経験では、2歳9カ月と4歳の子供ですでに超自我が十分に活動していることと驚かされた。その上、私のデータは、この早期型の超自我が年長児や成人のそれらに比べて測り知れないほどの激しさ、過酷さをもって、幼い弱々しい自我を文字どおり押しつぶしている、という事を示している。

(「メラニー・クライン著作集 3」3-4p 誠信書房)

しかし、この超自我は、現実の両親とは似ているが、やはり異なっている。超自我の力によって

子供が狂倒され粉々に引き裂かれるという恐怖、あるいは被害者によって困まれているという恐怖をもつのは、子供の精神生活では正常なことと見なすようになっていく。…神話や童話からでてきた人食い狼、火を吹く竜、すべての邪悪な怪物がそれぞれの子供の空想の中で留置して、無意識のうちに影響を及ぼし、自分はその邪悪な奴らに迫害され、脅かされているように感じている(『同』4p)

それでは、この恐怖的不安を生み出す超自我の源泉はどこにあるのだろうか。

『快感原則の彼岸』という書物の中で、フロイトは、人間の生命の始まりにすでに攻撃衝動、ないしは死の本能が、リビドーないしは生の本能、エロスと対立し、絡み合っている、という理論を提唱した。続いて、二つの本能の融合が起こり、サディズムへと変わっていく。その死の本能に破壊されることから逃れるために、生物体は、自己愛的・自己中心的リビドーを用いて前者(死の本能)を外に押し出し、対象へと向けるのである。フロイトは、この過程を人間の対象とのサディスティックな関係の基本であると考えた。私は、さらに、死の本能が対象へと外に向って偏向していくのと並行して、精神内界では、外界に向けられなかった残りの部分に対する防衛反応が進行する、ということをおきたい。というのは、攻撃衝動によって破壊されるという危機感が自我内に過度の緊張、自我にとっては不安として感じられる-を惹き起こすため、心的発達初期にすでに自我は死の本能に対してリビドーを動員するという課題に直面させられる事になるからである。しかし、二つの本能が融合しているために、それらを再び分離することができないので、その課題は不完全に達成されるに過ぎない。精神のイドないしは本能水準で分割協定

こり、それによってこの本能的衝動の一部が他者に対して向けられる事となる(『同』5-6p)

それでは、この攻撃衝動が両親の威力と合体して激しい恐怖を与える理由は何故か。

次の二つの理由から、子供が自分の攻撃衝動からおこる不安を外界に対する恐怖と受け取るからである。その理由というのは、子供はその対象を外的目標としていること、攻撃衝動を対象に投影してその方向から自分が攻撃が出ているかのように感じる事二つである。このようにして彼は、自らの不安の処所を外側に置き換えて対象を危険なものに変えている。しかしながら、その危険は本来自身の攻撃衝動によるものである。そのため、対象に対する恐怖は決してその子自身のサディスティックな衝動の投影と比列しているのである(『同』6P)

この外的対象は母親の乳房であり、ここで子供は人食い妄想を伴うカニバリズム期を経験する。しかし乳房は憎しみの対象であるだけでなく、満足を与える「良い」乳房でもある。子供はこの二つを分裂させることによって愛と憎しみを分離させる。しかし破壊衝動は「悪い」乳房のみに向けられるのではない。カニバリズム期(口愛的サディズム期)に続いて、肛門愛的サディズム期・および尿道愛的サディズム期では、母親の内部を攻撃しようとして、尿や糞便を利用する。この妄想の中では、母体は非常にたくさんのペニスや赤ん坊で満たされており、これらすべてを子供は食いつくし、破壊したがる。つまり母親の内部を攻撃するとき、子供は非常に多くの対象を攻撃しているし、その結果を背負う過剰に乗り出している。子供は「良い」乳房を「取り入れ」ることによって統一と統合に向かおうとするが、欲求不満と不安のためこぼれるがされて、良い乳房と悪い乳房を分裂させておくことが困難になることがある。

不安を処理したいという生命衝動によって必要な欲求によって、早期自我は基本的な機制と 防御を発展させるように強いらられる。破壊衝動の一部は(死の本能の)力が外に反映して外界に投影され、最初の外的対象である母の乳房に掃せられると私は考える。フロイトも指摘したように、破壊衝動の残りの部分は、生体の内部にあるリビドーによって拘束される。けれどもこれらの過程のどちらもその目的を完全に成し遂げるわけではないので、内部から破壊されるという不安は依然として働き続ける。この脅威の圧力のもとで、自我がこなごなに砕け散ろうというのには、私には自我の統一性の欠如とよく対応しているように思われる。この自我の細分化が精神分裂病の解体状態の基礎であるように見える(『同』4』8P)

このように、迫害的恐怖は、単に口愛的要素だけでなく、尿道的・肛門的要素も関与する。つまり、後者から生ずる攻撃では、危険物(排泄物)を自分の中から追い出し母親のなかへ追いやるようとする。

憎悪を持って開放されたこれらの有害な排泄物とともに、自我の分裂排除(split-off)された部分も又、母親の上へ投影されるといよりは母親の中に投影されるというべきだろう。これらの排泄物と自己の悪い部分は、対象を傷つけるばかりか、対象を支配し、対象を手に入れることにもなる。母親が自己の悪い部分を含み持つ限り、母親は分離した個体として感じられず、むしろその悪い自己として感じとられる。今や、自己の一部に対する憎悪の多くは母親に向けられる。この結果、攻撃的対象関係の原型を確立する同一化の特殊な形が導かれる。これらの過程については、投影的同一視(projective identification)という言葉は提案したい。投影が生ずるとして、母親を傷つけるか支配しようとする乳児の衝動から引き起こされるとき、乳児は母親を迫害者と感じてしまう。精神病的被害者では、対象と自己の憎むべき部分との同一視が、他の人々に向かう強烈な憎悪を引き起こす。自我が過剰な分裂と自分自身の一部を外界に開放することに囚われている限り、自我は母体で腐敗してしまう... 自己の悪い部分だけでなく、自己の良い部分もまた開放され投影される。沿うなると、排泄物や排泄物の意味をもち、排泄物とともに他の人々の代りに投影され、開放される自我の部分は、自己の良い、つまり愛すべき部分を表現している事となる。投影のこの形に基づく同一視は対象関係に再び有害な影響を与える。良い感情と自己の良い部分を母親の代りに投影することは、良い対象関係を発展させ、自我を統合しようとする乳児の能力に本質的なものである。けれどもこの投影過程が過剰に押し進められる場合、人格の良い部分が失われてしまったように感じられ、このようにして母親は自我理想になってしまう... この結果、これら自分自身の良い部分を外界において代理するような存在に過剰に依存する事となる... 理想化のなかで育まれる主な過剰は、幻覚的満足の場にも働いている。つまり

それは対象の分裂と、欲求不満および迫害双方の否認である。欲求不満を引き起こし、迫害する対象は、理想化された対象からはるかに遠くに置かれる。けれども悪い対象は良い対象から隔てられているだけでなく、欲求不満の全状況と欲求不満の結果生ずる悪い感情(痛み)が否認されてしまうようなおなじように、その存在も否認されてしまう。そしてこのことよりの現実の否認と結び付いている。心的現実の否認は、早期の心性の本質的な特性である強力な全能感を通してのみ可能となる... したがって幻覚的な満足では、二つの相互に関連しあう過剰が生ずる。つまり理想的な対象と状況とを全能的に作り上げる過剰と、悪い迫害する対象と状況とをおなじように全能的に消滅する過剰である... 迫害的恐怖と分裂的機制によって特徴づけられる一定の理想化における否認と全能の過剰の重要性を考えると、精神分裂病における誇大妄想と被害妄想の思い起こされるだろう(『同』4』4-13p)

クラインは、ここで精神分裂病に多く見られるひそかな全能感と被害妄想の共存の理由を説明している。それはさておき、このポジションを、クラインは妄想・分裂的ポジションとなすだけ、そのポジションの次にくるものを抑うつ的姿勢(depressive position)と名付けた。抑うつ的姿勢は、攻撃衝動によって、対象が失われる恐怖が増大する結果、罪の意識が生じ、対象を償おうとする結果である。

その結果、喪失への恐怖が増大し、悲哀(mourning)にも似た状態になり、強い罪悪感が生ずる。なぜならば攻撃的衝動が直接愛の対象に向かうように感じられるからである。今や抑うつ的姿勢が全面に現れたのである。次々に生ずる抑うつ的感情的正にその体験が、自我をより統合するのこぼれである。なぜならばその体験によって、内的状況と外的状況との界がより統合されるだけでなく、心的現実に対する理解が増し、外的世界に対する認識が生ずるからである。

(『同』4』19P)

以上の二つのポジションの通過が幼児期の数年にわたるが、この通過が正常に行われない場合、例えば迫害的ポジションから抑うつ的姿勢に移行できず、自我は妄想-迫害的姿勢に固着することもあり、それ以降の生涯における精神分裂病の様々な死産の基礎が作り出される。

3. 以上、クラインの理論において重要と考えられるものを抽出してみたが、興味深い論点を発展規定の弁証法から捉えなおしてみよう。クラインにあっては、対象関係の形成と性質の移行が幼児期の心的装置の中で発生すると想定されている。この点はフロイトも同様である。しかも総合による抽象という観点から幼児期の心的現実の発生の問題を捉えなおそうとすれば、もう一度フロイトの総合による抽象論と、ヘーゲルの『精神現象学』における二つの自己意識の相互承認論に立ち戻らざるを得ない。

まず、同一視(同一化)の概念から検討する。C. ライクロフトによる定義によれば(『精神分析論』河出書房新社、ある人物が、a. 自分の同一性を他の誰かの内へと拡張したり、b. 自分の同一性を他の誰かから借りてきたり、c. 自分の同一性を他の誰かと融合ないし混合したりする)の過剰の事であり、次の四種の同一化が区別される、という。1. 一次的同一化: 幼児期に、自己と他者の区別が無意味であるような段階で生じていると推定される事象。2. 二次的同一化: 自分とは別の同一性が現出されているような対象と同一化する過剰の事。この過剰によって自己と対象の敵対関係が減少するばかりか、対象からの分離体験の否認をも可能してくれるから、一種の防衛とも言える。3. 投影による同一化: ある人物が自分自身を、自分にとって外的な対象の内側に存在すると想像する過剰であり、この同一化によって対象に対する支配という錯覚が生み出され、自らの力量不足を否認するから、これも一種の防衛といえる。4. 取り入れによる同一化: ある人物が他者を、自分の内側に自分的一部分として存在すると想像する過剰のこと。クラインの理論では、2と4の同一化が重要な位置を占めるが、ここでは同一化一般について考察してみたい。心理学者ワロンは、次のように言っている。

意識において自我(Moi)と他者(l'Autre)は同時に形成されます。自我と他者は、密接な結びあったものであり、それぞれの変化は互いに相補的であり、互いの分は相互に結びあっているのです... 他者は意識において自我と同じくらい内的現実性を与えられているし、また自我も他者に劣らず内的現実性を帯びています... 子供はまた対象関係の代りに自分自身を置き込まれています。子供がその中で占める位置は固定しており、そこからしばしば深遠な影響を受け、しかもその刻印を消すことのできない一方的なものなのです。少なくとも、身の回りの人々がこのような堅固な不動性をもっているからこそ、子供は、自分の代りに内なる他者を見いだしていくのです。それまで、ことも対立する二つの役割を相補しあう二つの役割を交互に演じたり、またひとり二

役の会話を、そのうち一方に身を置いたりせられ、二役交互にやっけていくこともありましたが、しかし、自我が自らを主張し始めると、二人を交互に演ずるといふことはなくなり、たゞ一人だけになっていくのです。しかしもうひとりか完全になくなっていくわけではありません。それはもはや自我ではなく、第二の自我になるのです。ヒュール・ジャネが「社会的自我」と呼んだものはこれです。つまり、それは自我の分身であり、自我と共存し、自我と切り離しては考えられないものなのです。しかし、これはいつも自我と一致するものではありません。いやむしろ一致しないことの方が多いのです。この第二の自我は、一人ではありません。そこには複数の他者(111)が含まれています。第二の自我は、自我と分離できない対をなし、自我の永遠の同伴者であって、これが外面世界と周囲の具体的な世界をつなぐ、媒介者、つまりいわば「媒介」の役割を果たしています。いすれにせよ、第二の自我は、自我の我々の意志と自我に対する他者の影響を同時に表しているのです。第二の自我は一般に二人称的であり、他者は三人称的だと言えます(「身体・自我・社会」ワロン ミネルヴァ書房 31-39p)

ワロンは、自己と他者が分離し不分離であるという想定から出発している。それに対して、フロイト、クラインは、関係的個体ではなく、自己完結した個体から出発している。そしてその後、他者が、超自我、同一化などの形態で、この完結した個体に組み込まれるとする。ここで問題が、まず例えば、乳児が、親に同一化するという場合、同一化を判断するのは誰かという事である。ライクロフトによれば、双方の個体は親を同一化しているのだから、AとBを比較するのは、外部の第三者であることになる。外部の第三者によって比較されるのは、AとBの差異だけではあり得ない。絶対的な差異というものはその反対、つまり両者の絶対的同一性を表現するにすぎない。そこで比較されるのは、両者を共通の見地から見た場合の差異である。差異がなされるのは、同一化の意味が異なるから、外部の第三者がその差異を判定しない限り、乳児が自ら自己と親の差異を判定して、その後で親に同一化するという事になるが、これでは同一化にならない。むしろ、相対関係、相互的他者でありながら、相互的に媒介しあう関係が形成されることになる。次にライクロフトは、二次的同一化は、乳児と子供の敵対関係を否認させる防衛的意義をもつというが、この敵対関係はどこからできたのか。クライン流に推定するならば、子供の攻撃衝動を緩和させる役割を果たすのだろうか。更にいえば、この否認は、いかなる意味で防衛的なのか。現実の、あるいはイメージ上の敵対関係を否認することは、どのような目的のために役立つのか。この点が曖昧なままなので、防衛の目的もはっきりしない。むしろ、暗に、外的現実への適応のために防衛が利用されている、と読み取ることも可能である。ワロンは、自我未分化の状態から出発して自我と他者の同時成立を主張し、さらに両者は、媒介しあひ、相対的であるとした。この過程に沿えば、同一化の概念を用いて、他者との関係を推定する必要はない。フロイトが、同一化概念を用いた一つの理由は、彼のカント的主体が、いかにして他者が「特親」現実不在であっても、継続的に厳しい道徳的抑圧を受け入れたままであるのかという問題を解く為であり、そのために超自我というカテゴリーが用いられたのである。だから、ワロンは、この問題は、拘束的な家族の影響を受けた社会的自我(第二の自我)が、相対的に自我と対峙し、答えている。

3 次に、クラインに独特な、幼時早期の超自我機能形成と、攻撃衝動の主張について考察しなければならぬが、そのために、まず同一化概念の総括を含め、ワロンを参考にしながら自己意識の相互承認のプロセスの問題を再考してみたい。哲学的になるが、再び「精神現象学」からの学習である。意識から自己意識への対多承認の叙述の過程はここでは省く。意識(個人)が欲望の水準において非有機的自然に関与する場合と異なり、ここで欲望の対象は、それ自身が自立的である他の意識である。しかし、この他の自己意識は否定される中で他者になることなく、自立的であり続ける。このことによって、自己意識の対象は現在化した類であり、自己意識が満足を得るのは、類との統一、換言すれば他の自己意識の中でしかない。類と個、我々である我、我である我々、この対立物の統一が、自己意識の概念である。だから自己意識の各契機は、常に二重の意味を持つ。つまりある規定を持つと直ちに、その反対の規定も持つものである。個人AとBが対面している図において、Aの行為は、彼の行為であると共にBの行為でもあるという意味を持つ。なぜなら、BはAと同様、自立的で、自己内で完結しており、自分自身を過ぎないものは何一つ自己内に持たないからである。換言すれば、Aが対面しているBは、自覚を持ち、自立した対象であって、Aがその対象に対して為すことをその対象自身が自ら自分でも為さない限り、何事もその対象に対しては為し得ない。すなわち、各個人は、自分か為すことを他者が為すことを見る。各個人は、他者に要求することを自分自身で為す。だから各個人が自分か為すことを為すのは、他者がそのことを為す限りでの事ではない。この自他の行為の運動の中でAは自分の規定を交換し、両極に分裂するが、にもかかわらず、反対項に移行して自分の外に出て、その他者になった場合でも、同時

に自己内に踏みとどまる。自己が自己の外に出たことを意識しているのである。Aは、Bのなかで自立的であることによって自立的でしかないことも知っている。

ワロンは、子供の遊戯において、各人が役割を交換している事実を観察している。この相互行為から上記の各個人の相互承認過程に移行するよりはより高次の相互媒介が必要なのだろう。その媒介はまず両極への依存関係からの脱却過程が不可欠に思われる。各個人自身にとってはこの過程などのように成立していくのだろうか。この成立過程をクラインの発達の過程に照準させて考察する。

4 以下の場面では、自己意識の不等性の面から叙述が始まる。つまり、一方の極は、承認するもの、他方は承認されるものとして示され、さらに自己意識はお互いに絶対的相対的の運動を実行しておらず、従ってお互いに自己の自己意識は客観的真理となっていない。相互承認の、前掲の運動はここでは他者の死を目指し運動として実現する。この生命を賭けた闘争によって両者は主観的な自己確言を社会的に妥当する真理と為めようとする。ところが他人の死によって確認されるものは、対立関係の崩壊であって、かえって自己意識の客観性を否定される。ここから経緯によって、各人が知ることには生活が単純な自己意識と同様の本質的であるということであり、この自立世界(物質世界)が本質的契機として導入されるが、その一方は自立的意識で、独立存在を本質とし、他方は非自立的意識で生命ないし対他性がありかたを本質とする。ここからのヘーゲルの叙述は、主人-物-僕という三者関係を描いており、アダム・スミスの労働論を下敷きにして、しかし、少し手を加えれば、色々な解釈や応用できないだろうか。例えば、母子関係は、ある意味で主従関係である。子供は、母親に依存しなければ生きていけない。母親の死後一つで死が到来する。だから、子供は母親(ないし養育者)に奉仕する。

僕たることにとっては、主か本質である。僕の意識が、不安を感じたのは、これやあれやの事に對してでも、またこれやあれやの環境に對してでもなく、自らの全存在に對してである。というのは、僕が絶対的たる死の恐れを感じたからである。このため僕の内面から解体させられ、自分自身の隅々まで震え上がらされ、すべて自分のなかで固定したものは、何もかも揺り動かされている。この全く一般的な動揺、すべての存在が絶対的に流動させられることが、自己意識の単純な本質であり、絶対的否定態。(「精神現象学」121P 河出書房新社)

であり、この解体を奉仕という形で実現もしている。しかし、主の要求する奉仕の労働(現象学では、対象形成労働であるが、親子関係における奉仕は、親に対する愛情表現と物の贈与)を通じて、恐れに對抗する。こうして僕も、主に對して対立関係に入る。そして僕の自己意識を確認し、僕自身から、僕に對する対立関係に入る事になる。しかしながら、これには、主と僕が対等な相互承認関係に立つことにはならない。達成されたのは、僕たる範囲における自由であり自己意識である。既に見たように、僕が自己に帰ることは恐れと奉仕一般、乃至形成という二つの契機が必要である。奉仕と服従の訓練がなければ、恐れはいつまでも形式的なものにとどまる。一方、形成がなければ、恐れは内にあるだけで沈黙しており、意識は自分だけのものとならない。

主と僕の関係から、ヘーゲルの叙述論、ストア主義の叙述に移っていくがそれは僕が僕の立場において行使する自由の意識であり、その次にキリスト教的に一般意志と個別意志の和解を説く。この展開では依存関係からの脱却の問題は中途半端にしか提起され得ない。しかし、ヘーゲルの主と僕の関係の内容を宗始論の成立と読み、クライン的思考もまたそれによって宗始論の準備をしていることがわかれば、ヘーゲルの叙述の意義と限界が新たな意味を持って現れるだろう。それは別に展開するとして、ワロンは、前掲書において次のように述べている。

周囲の人々は、結局のところ主体が自己を表現し、自己を実現していくためのきっかけ、ないしは動機となる存在にすぎません。ところがそういう周囲の人々に、主体は生命を与え、自分の外に永続して存在するもの、という性質を与えます。こうしたことが可能なのは、主体が自分のなかで、自我と、その不可分な補完者である他者-自分にとっては本質的に外的な存在-との区別を打ち立てたからなのです。この区別は、実在の人々との関係に結んできた習得性関係をたゞ山鏡的に写しとったものではありません。この区別は、主体のもっと内面で行われる二項分割の結果なのです。その二項は、互いに対立的であるのに、あるいは対立的であるからこそ、一方なしには、他方も存在できない二項です。一つの項は自己との同一性の確立であり、もう一つの項は、この同一性を保持するためこそから排除せざるをえなかったものの他者性なのです(前掲書 66P)

ワロンは、自己意識の二重性をせつかく指摘したのに、主体の二項分割の一方の項が、排除されること
によって、同一性が確保できると結論している。これは古い同一論への回帰にしかならぬ、主体の
二項分割が維持されているからこそ、主体は他者と自己を区別し、自己と他者への対峙が可能となっ
ているのではないのか。ワロンが、古い同一論に回帰したことによって、精神病理の理解も中途半端になっ
ている。

自我は支配や完全統合の意志が働いているために、通常この社会的自己は縮減され、見えなくさ
れ、抑圧され、そして否定されているようにさえ見えます。しかし、どのような決断も、あるいは
不決断も、自我とその反対者との一つの会話なのです... 主体が社会的自我と交わすこのよう
な会話は、幼い子供が自分自身に向かって話すのと良く似ています。これは、三才近くになって
自我が明らかになってくると、消えていくのですが、これは縮減して見えなくなるという事であ
って、完全に除去されてしまうわけではありません。押えつけられたと見たものが、実は、生き
続けているのです。かつて催眠や暗示によって同一個人に二重人格や多重人格を見だし、また
つくりだすと称する実験が行われていたことが、そこで利用されていたのも、明らかに、この二
重性の事実だったのです... (更に各自が持つから内にもっているこの他者が、いわば自動的
に、又具体的に解放されてくる場合があります。クレランポーが心的自動症として臨床的に厳密
に記載した影響観念等は、そういう形で生じてきたものです... 彼が示したように、患者は多く
の場合、最初、突然不意に呼びかけられる声を聞くのです。ふしつかに人を傷つける非難、そし
てその社会との関係のなかで人をひどくはるかする非難の声を聞くのです。ここで解放された
第二の自我は、攻撃的ですが、それまで主体が自らこの第二の自我を言いなりに左右し、飼育し
てきたと思込んでいたところを、第二の自我の側が、これに復讐してきたようにも見えま
す。またそれは、患者が社会関係をむすぶなかで自らの内に蓄積してきた疑念でもあります。
これが、社会的自我を媒介にして表に現れてきたのです... 最初はこうした現れかたをするので
すが、そのうちに、患者の考えたことが他者によって反復される、といった形をとってあら
われてきます。自分の最も内面的な思考が社会的自己を介して外に漏洩したり (divulgate)、
主体が意識的に認識できる以前に、つまり自分でイニシアティブをとり、責任をとれるようにな
る以前に、自動的に言葉が出てしまったりするのです (premonition) 他者が自分、自分のもの
であるはずのない考えを押し付け、自分行動を指示してくるのです... 悪化妄想も、そのよ
うに解釈しなげなげなものです。かつて主体が自分にとって最も親しく、もっとも内面的なもので
もって作り上げていた自我が、様々な力に侵入され、おかされて、そこにもともと外的なものとし
て排せられていたものが自己を表現しはじめるのです。外的なものに抗して戦うということ、
このことこそ、自分自身が統合された一つのものだという感覚を強めるものです。ところがこの
影響妄想や悪化妄想の中では、主体は自らの人格性が自分から離れ、くたけて、解体するのを感じ
るのです (『可憐書』 69-71P)

要するに正常な意識状態で、社会的自己は潜在的に存在しているが、一定の条件下で、自己を外的に
表現するようになる、という。しかし、正常な意識状態で両者の関係が正しく規定されているのだら
うか。自我同一性を保つために社会的自我を抑圧するとすれば、その自我を他者と区別する標識はど
こにもとめるべきだろうか。AはAであり、BはBであるとしても、AとBを区別する規定性が消滅する。次に
自我と社会的自我の関係を、より簡単に表現するには、商品の価値観を想起するのがよい。諸商品
は、それらの相対的価値を共同で表現するために、一定の商品を価値一般の形態として排除し、商品世
界の統一的な相対的価値観を、客観的固定性と一般的・社会的妥当性を獲得させる。排除された独自の
商品群は、その自然発展の等価的社会的に適合し、貨幣商品となる。今、金を貨幣形態とす
ると、貨幣の第一の機能は計測のように、価値の尺度である。金によって一商品の価値表現をするに
は、いまや他の商品と隊列を組む必要はなく、一トンの鉄 X 量の貨幣商品、というような単純な方程式
で十分である。但し、商品の価値または貨幣形態は、その価値一般と同じように、その感質
的・実在的な物性から区別された、つまりたゞ観念的または表現的形態である。鉄・亜麻布・小麦
等の価値は、限らばみえないけれど、これらのもののうち実存する、それは、それらの物と金との同
等性、金に対する一つの選別それはいわば、それらの物の頂点の中心の価値観のように現れるによっ
て、表象される (D. K. 第一部・第一編・第三章・第一節)

価値のしての諸商品は、価値の尺度としての金によって自らに關係し、度量する。同時に、社会的共同
行為によって尺度となった諸商品、ワロンにならば、社会的自我に対する一つの表象的選別によっ
て、個人は自らに關係し度量し、この度量によって、他の諸個人と絶対的に度量する。これによって個

人AとBが比較され差異が確認される。だから、自己同一性を保障するのには社会的自我の抑圧ではなく、
諸個人の共同行為による社会的価値観の確立であろう。それでは、ワロンのようにクレランポーの心的
自動症を解釈して、これを抑圧された社会的自我の解放というのでは妥当だろうか。社会的自我と自己の
矛盾、貨幣の価値尺度論を以ていえば、例えば、金と銀が同時に価値尺度となった場合に、その二重
化がその機能と矛盾するような事態が生じたとき、或る物の価値(価値観)は、価値の大小と価値と
の一つまり、価値の大小とそれ自身の貨幣表現との、質的矛盾を宿らせるのであり、このために価値は
総じて価値表現を止めることになり、絶対的に何等の商品でもないもの、例えば、良心・名誉なども形式
的な価値をもつことができる。ここではそうした意味で本来の商品でない物も含めて価値尺度論から問
題を迫ることにするは変動しうる。金に対する一つの選別価値観のように頭の中にくっついてい
るの、新たな尺度がこの問題を解体しようとする。この内的表象上の古い尺度と新たな尺度の矛盾は
意識形態となる。文意の内容が、大抵、自己の行為に対する批判である理由はここから説明できるので
はないだろうか。次に価値の変動は価値尺度の変動からのみ起こるわけでもない。できの悪い商品は
自分ではよい商品だと思込んでいても、商品市場で排除され、排除される。金に買収できると思込
んでいたその商品は、現実の排除に直面して、金に対する自分の選別価値でしかなかったことを思い
知らされ、自分を度量する全く私的な尺度を形成しようとする。この商品によく似た意識の個別状態
は、自分だけが一般的であろうとするから、ここに選別した全能感が生まれる。精神分裂病の人々に、よ
く見られる全能感と無力感の結合はここから生ずるのではないのか。クレランポーが観察した別の状態
は、思考が外に漏れるという体験が(それは逆思考を吹き込まれるという体験もある)、既に商
品世界の在り方からわかるように、諸商品相互は、一般的な等面としての何らかの他の商品に対立的に
選別することによって、相互に選別することができる。一般的な等面が消滅すれば、商品はお互いに選
別できない。ここで商品世界から離れて、諸商品から遊離した一者を考察すると、ここに生まれるのは
ライブニットの単子である。多数の単子はそれぞれ自分自身に關係するだけで、お互いに無關係で、無
関心である。しかし、向外的に存在する一者の先端まで自立性が突き進められると、それは社会的自立性
となり、自分自身を破壊することになる。しかし、多くの一者は自己保存のために相互に排斥しあ
い、反発する。ところがこの相互反発が、実際には相互の関係を形成し、相互の反発を媒介とするそれ
らの自己保存である事になる。こうして多くの一者相互の否定的關係による一者の自己保存は、むしろ
一者の解体であり、一個の一者の中への牽引である。

単子的になった個人にとっては、社会は自己とおよび相互間の關係のない多数者の集まりとして現象
するから、自己解体に抗するためには、まず反発と牽引という外的な相互關係が形成されなければなら
ない。内的な思考が外に漏れ出すという意識、他者の思考が吹き込まれるという意識、他人に操ら
れるという意識等、かつてクルト・シュナイダーが、精神分裂病に最も特有な半定基準においたこれら
の「自我障害」の病理は、単子的諸個人が相互に關係しようとする(そして人間が現実的であろうとす
れば必然的に生まれる)欲求の場合にとり、意識形態とはいえないだろうか。しかし、反発を媒介とする牽引
は、相互に外的な關係であり、自己意識を形成できるような総合による抽象を経ているので、自己お
よび他人への對峙が成立せず、關係するといっても、謎としての自己および他人が漠然と引き合っ
ていた状態である。ある中年の女性は、近所の人物を思い浮かべたとき、「ひっぱられてしまう」「から
だからなにかが友だちになってしまう」と訴え、その意識から逃れるために「なるべく他人のことは考
えないようにしている」という。人が近づいたとき、その人が取られてしまう意識が強くなるので、
ほとんど自宅にいる。自宅に籠っていても、ますます社会的距離が喪失するから、ライブニットの事態
が強化される。学校時代に発病し、引き籠りが長くなるケースは、社会で労働した経験をしたあとで発
病したケースに比べ難治であり、外的刺激が多すぎても、少なすぎても、すぐに混乱し始める。そして次
第に自分だけの理想世界とじこもるようになり、そこからでることが困難になってくる。
5 まで、ここまで見てくると、かつてフロイトが、精神分裂病に精神中の「分裂」が存在する、と主張
した事は、逆ではないかという疑念が湧いてくる。ワロンが指摘したように、自己は内的に二分され
ているのが普通であり、内的二分を通じて、個人は社会的になる。内的二分を放つような事態が生
ずれば、個人は社会や他者との媒介ができなくなり、「現実からの離反」が生ずる。フロイトの理論は
逆である。

回診後の患者の報告によってこれはむしろ意識状態(アメンチア)のような外的現実から非常に
隔たった状態においてさえも、一人の正常な人間が彼らの心の片隅に潜り込んでいて、あたかも
事件に加わらない観察者のように、病気の亡霊を傍観し、亡霊が通りすぎていくのに任せていた
のだ、という事実を知るのである。一般的に全ての場合がこのようなものと仮定してよいのか、私
は知らない。しかし私は、これほど激しくない異なった経過をたどる精神病についても、同様な

ことを報告することができる。私はある個性パラノイアの症例を思い出す。その症例では、患者は嫉妬妄想の発作にはいつも夢によって、その発作の原因について、完全に妄想から解放された正確な説明を分析医の理解のために提供したのである。このような事実から、神経症患者の夢からは、覚醒時の生活とは認められないような嫉妬を推定し得るのに反して、むしろ反対に精神病患者にあっては、昼の患者を支配していた妄想が夢によって訂正されるという、興味ある対照が現出される。これら全ての症例でおこったことは精神中の「分裂」であるという考えを、おそらくわれわれは一般に妥当するものとして推論することができよう。たった一つだけではない、二つの精神相境度が形成されたのである。一つは現実を考慮に入れる正常な態度であり、他は本能の影響のもとに自我を現実から離反させる態度である。この二つの態度は互いに併存する。結果はその相対的な態度いかにかかっている。もし後者の方がより強かったり、強くなったりすれば、これで精神中の条件が与えられたことになる。この関係が逆になれば、一見したところ妄想性疾患が台頭したような状態が生ずる。しかし、実際には、妄想が顕在的なものとして発症状態に達する以前に、長い期間すでに形成され終わったものとして存在していたのである。この事実は多くの観察から明かになるが、このような見解によれば、現実から離反した自我の態度の強度が弱まり正常な自我の態度が強化される場合には（この台頭状態における）妄想は、再び無意識の中に後退していくのである。はじめ私はこの見解をフェティシズムの症例によって確認した。フェティシズムの対象を作り出すということは、自分が去勢不安から逃れるために、去勢の可能性の処処となるものを破壊しようとする意図からおこる。もし女性が男性と同じようにペニスを持っているならば、我々は自分自身のペニスの維持に関して（喪失）の不安を感じる必要はない。ところが、われわれはフェティシズムでない人々に同じように去勢不安をつのらせ、おなじようにそれに対して反応するフェティストに出逢う。つまり彼らの行動は二つの相対立する態度が同時に表現されている。一方で、彼らは、女性器にペニスを見出さなかったという認識の事実を否定するが、他方では女性にペニスが欠如しているということを承認し、そこから正しい結論を引き出してくる。この二つの考え方は、彼らの全生涯を通じて相互に影響しあうことなく併存し続ける。これが、「自我の分裂」と呼ぶべきものである。この機制を研究してみるとわかるが、いつでもそれは不十分な手段、現実からの離反の不完全な試みである。否認はいつも承認によって補足され、相互に無関係な二つの態度を通じて、自我の分裂の事実を明らかにする。

（『精神分析学概説』204-207P フロイト著作集 9 人文書院）

フロイトにとって、自我の分裂は、神経症、フェティシズム、精神病が形成される条件と推論されたが、その分裂が現実否認と言う機制に基づくこととされている。そしてその否認が承認によって補足されるともされる。ここで問題となるのは、フロイトの主体にあっては、「現実」と「自我」が対立的に立対するものとして把握されていることである。しかし、なによりも個人にとっての第一の現実が自我の現実ではなかろうか。自我の現実を形成するのは他者との現実的野望であり、その野望の中でのみ事物の認識が確定されるという仮定を立てれば、自我（ないし一般に言えば個人）と他者との相互的媒介が障害される事象によって「自我の分裂」がもたらされ、その個人の自己把握が困難となることと推定される。共同性が解体すれば、事物の認識が確定されないのである。例えばペニスの存在についての知識が興味となる。つまり否認は、自我分裂の原因でなく、「自我分裂」の分裂の結果であるということとなる。但し、フロイトは、注意深くも、否認が承認によって補足されていると述べている。換言すれば、全くの孤立した個人というものは、カントやライプニッツのような哲学者の著作の中には存在しても、批評的観察によって反駁されているということである。

ブルジョア社会で通用しようと思ふならば、まず自分の労働の現実的な非同等性を抽象して商品世界に入り込まなければならぬ。個人の労働力が自覚的に一つの社会的労働力として支出され、共同の生産手段をもって労働するような自由人の団結社会では、彼らの労働及び彼らの労働生産物に対する社会的態度は、生産においても分配においても透き通るように簡単であり、物象によって覆われていない。逆に自分の労働の現実性を抽象しなれば社会的に承認されなければならない社会的野望において、フロイトのいう「現実からの離反」という精神病形成の条件は、フロイトとは違つた意味で増大するのでないか。精神分析でいう否認、自我分裂がこのような離反した態度に基づいてカテゴリー化されたとすれば、メラニー・クラインの理論において大きな役割を果たすことになる投影（投射、projection）概念も同じ様な離反した態度に基づくものでなかろうか。フロイトは、主としてパラノイア、嫉妬妄想の例に即して投影概念を用いているが、必ずしも一義的ではない。しかし、要点は自らに認識することないし自らがそうであることを拒否するものを、外に投影させる、ということである。例えば、論文「本能とその運命」（1915）、「否定」（1925）では、投影されるものは結局、「憎まれる

もの」「悪いもの」であり、クラインの見解に近付いている。だが、個人の内部にあって憎まれるものが、否認されて外界に棄却されるとすれば、その個人が憎まれるものと自己を区別していること、換言すれば、そのように自己判断していることを意味する。判断とは分割であり、分割は、自己意識の二重化なしには有り得ない。つまり個人は意識一般でもあるのだから、ここで表明されているのは、その個人が社会的に憎まれていようことを意識しているということである。ところがその個人が自分で憎まれる理由を特定できないとすれば、社会が二重化になっており、その個人に見せる顔はその表面だけであって、事実上は、本人を排除しているのだという意識が生ずる。実際、ブルジョア社会は、剰余価値の源泉を隠蔽する幾多の機構から成り立っており、現実的野望は意識の上にくわい、ともあれ、こうした事情で彼は不特定の個人の表面上のしぐさで慰め、敬意ある意図を感じるようになる。迫害妄想におちいったある青年は、東北の農村から、出稼き工市にてきた。彼は、故郷の小・中学校でいじめにあい、既に十分な精神相境を負っていた。彼の内部に蓄積された劣等感と、都会での様々な差別（一部は現実、一部は想像上と思われる）によって増強された。彼は次第に固定した職場で安定した人間関係を築くことが出来なくなった。職場のみならず、通りかかると人間も、子供も老人も自分を迫害し、差別しており、そのため自分はいまやまいかと思うようになった。彼は市の人間は自分が東北の人だからといって馬鹿にしている、と訴えるのだった。彼は自分の目つきがきつからよけい自分を迫害するのだろうか、この目つきを直してくれと訴えた。それは困難なことだ、というとお前も俺を馬鹿にしているといつて診察室の席をけって怒って出て行く。病室の食堂で時々現れて、注文の食事がだされるのが少しでも遅いと、俺を馬鹿にするのかと賤罵さんにくってかかった。そのうちに、老人や子供が夜、次々に暴行を受けるという事件が起るようになった。数カ月たつて彼が病室で謝罪された。捜査照会を求められ、精神分裂病で迫害妄想が強く、再びのおそれ強いのて留置院の必要性があるとコメントした。だが正式な精神科鑑定では、責任能力（つまり正常な判断能力があるということ）はあるので通常の裁判に付せられる事になった。被害者の感情を考慮すれば、その判断にも一理あるのかもしれない。しかし、現行の刑法の理念は復讐主義でなく、更正主義に基づいている。この理念をいかそうと思えば、まず彼を理解すること、彼の根深い劣等感と人間不信を解消することから始めるべきだろう。刑務所が、そのため機能してくれるだろうか。密かなに迫害妄想を持った人間で刑務所に収監された人は最初の週間のうちに自殺する危険が高い。

ブルジョア社会の日常生計の宗教は、剰余価値の源泉の隠蔽の上に乗っかっている。この宗教を支えようとするならば、諸対象のフェティシズムに反するあらゆる現実的野望の認識に反対する必要がある。

「現実からの離反」はこうして自然発生的に形成され、妄想形成の一役買うだろう。

フロイトは、『精神分析入門』（1917）で、迫害妄想パラノイアに罹患した一医師の事例を紹介している。

ある若い医師が、その住地を逐放されるはめになりました。それは、彼がこれまで親友としてつきあっていた、その地のある大学教授の息子の生命を脅かしたためでした。このかつての友人は、ほんとうに悪魔のような意図と鬼神のような権力をもっていると彼が考えたのです。ここ数年、自分の家族を襲った不幸、家族ならびに社会のあらゆる災厄は、みなこの友人のせいであると考えたのです。ところが妄想はそればかりで済まらなかったのです。この悪い友人とその父親の大学教授とは、戦争をさえ引き起こしてロシア軍を国に侵入させたというのです。このような男は何処に居てもいらい、この悪魔が死にさすれば、一切の災厄は終息するとこの患者は断言したのです。それでもこの悪魔に対する患者の昔の愛情はなお強く、一度この敵を至近距離から射殺する機会が得られたときには、手がしびれて動かなかったというほどでした。私が患者とちょっと話し合つて見たときに、二人の友情が遠く高等学校時代までさかのぼることが明らかになりました。少なくとも一晩は、二人の関係が友情という限界を超越したことがあったのです。たまたま一夜をともし過ぎたことがきっかけとなって、二人は完全な性交を行ったのです。この患者は、彼と年頃とその人好きのする人柄がふさわしい感情関係を、婦人との関係にもつてもいよいよまずなみに、そのようなことは一度もなかったのです。彼が初めて美しく上品な少女と契約をしたことがありましたが、この少女は、彼のうちには自分に対する愛情を見出せないという理由で、この契約を破棄してしまいました。数年後、患者は初めてある女を十分に満足させることができたが、その瞬間に、彼の病気が再発したのです。この婦人が喜びに溢れ、夢中になって彼を抱きしめたときに、彼は突然泣きだして切り込まれるような、不思議な痛みを感じました。のちになって、彼はこの時の感覚を、解剖して脳を出して見せるために切開をやらせているみたに違つたと自分で解釈したのです。そして例の友人が病理解剖学になってしまったので、彼は自分を誘惑するためにあの友人が亡くなった婦人を送ってよこしたのだ、彼に悪いといひたん

だん信じ込むようになりました。その時以来、自分かかっての友人の悪くみのために、さまざまの迫害の犠牲者になったと、考えるようになったのです(『前掲書』350P フロイト著作集 1 人文書院)

ここでは、追放妄想パラノイアは、個体が、過剰に強くなりすぎた同性愛的な衝動に抵抗するための形式である、と推論されている。同性愛は、現在の精神医学では精神疾患とは見做されていない。通常の青年の三分の一が過剰に経験する日常的な現象と見做されている。江戸時代の武士階級の間でも同性愛は容認され、広く行き渡った現象だった。フロイトの生きた特殊な時代の特殊な環境でのみ同性愛は「悪いこと」とみなされたのか、フロイト自身の世評知らずのせいなのかこの文脈ではわからないが、とにかくフロイトにとって同性愛は否認すべき衝動だったようだ。たかこの事例をすなおに読むと、この青年は生来性の同性愛者ではなく、両性愛者であること、あるいは異性愛に移行する中途であったことが文面から明らかである。同性愛が過剰に強いままであれば異性と関係するはずがない。むしろ彼は異性との関係を成就したとたんに発病している。新たな感情関係を現実と切り開こうとした時に、彼の頭の中の古い衝動が、その関係を呪ったとでもいえようか。それ以来、古い友人は敵としての意義を帯び、災厄の原因として意識されるようになった。

フロイト自身の事例をとっても、このように同性愛からの防衛としてパラノイアを解釈することは説得力に乏しい。まして、ここから推論して「憎まれたもの」を拒否してそれが外限に投影されて迫害妄想が生ずるという推論は、ますます根拠が疑われる。逆に憎まれるものは社会的に既に同定されているとして、それを精神分析医が患者の内部に投影するといった方が事実と近いのではないだろうか。

クラインが、母親に対する憎しみから発する破壊衝動が投影されて外界と内部の肉体から迫害を受けるという推論をしたことは現に述べた。しかし、私見や、フロイトの事例の検討、その理論を追求していくと、この概念は再構築する必要があると思われる。両親への依存関係は、ヘーゲルの主と僕の関係の叙述と同様、クラインにあっては一種の宗教的構造と映っているらしい。ただし、クラインでは、ヘーゲルと異なり、母親は畏怖すべき主体とは見做されておらず、よい母親と悪い母親に分割されて、悪い母親に対する攻撃が投影されて、迫害妄想が成立するとされている。これをもっと簡単に考えて、依存しながら畏怖すべき主体としての両親を想定すれば、生命と奪の権利を独占している両親は、恐れながら仕えるべき主であるということになり、主からの追放ないしその子感肉体的・精神的解体を意味する事となり、投影概念を媒介としなくても、クラインのいう分裂・妄想観念が成立することになる。そして分裂・妄想観念から抑圧観念への移行は、主(母親の全体像の認識ともなう)の精緻を承認して罪責感を抱き、服従することを意味することになる。

ところで、ニーチェは、『道徳の系譜』(1887)において、道徳の発生史、負目、良心の疾しさ、そして記憶の関係を論じて、(債権・債務関係のうちに負目、良心、義務、道徳、記憶の永続性の発生を求めた(『ニーチェ全集』1) ちくま学芸文庫)

負目の感情や個人的債務の感情は、既にオオオオオオ察したように、その起源をば、およそ存在するかきりでの最古の最原始的な個人関係のうちに、すなわち売り手と買い手、債権者と債務者という関係のうちにもっている。この関係のうちではじめて個人が個人と相対し、ここで初めて個人が個人と比量しあった(442p)...ともあれ、先史時代の尺度でもって測るなら...

共同本とその成員との関係も又、債権者と債務者という重大な根本関係を本質としている。人はみな一つの共同本の中で生活し、共同本の利便を享受している...人は保護され、いたわれらて、外部の人間すなわち「平和なきもの」が曝されているある種の危害や敵意に悩まされることもなしに、平和と信頼のうちに生きて...つまり、そうした危害や敵意を顧慮すればこそ人は自分自身を抵当に入れ、共同本に対して義務を負ったのである。もしこれをしなかったらどうということになるだろうか。欺かれた債権者としての共同本は、当然予期されるごとく、その人のできるかきりのつくらない返済をさせるのである...犯罪者は何よりもまず一個の破壊者とされ、これまで放かその分け前にあついていた共同生活の財貨や恩恵に関するかきり、全体に背く契約違反者、賞罰破壊者とされる(443-4p)...かくしてこの領域、つまり債務者のうちに「負目」とか「良心」とか「義務」とか「義務の神聖」とかいった道徳的な概念世界の発祥地がある。この概念世界の始まりは、地上のあらゆる大事件の始まりと同じく、ヒツコどく久きにわたって血で汚されていた(435p)...、が、ほかならぬこの関係においてこそその底力がなされるのである。まさにここでこそ約束をする人間が記憶を植え付けることが可能となる。あえて預言するならばここにこそ冷酷、残忍、痛苦といったものの産地があるのかもしれない。債務者はその返済の約束に対する信用を得るために、またその約束の厳粛と神聖に対する保障を与えるために、さ

らにまた己自身では、返済を義務や債務として自己の良心に契みつけるために、債権者との契約にしたがって、万が一にも返済しない場合の代償物として、なおまた自分の「所有」にかかる何か他のものを、なおまた自分の権限内に属する何か力のあるものを抵当に入れる(433p)... (そして「いかにして人間が記憶というものを植え付けられるのか?この半玉は王冠の神秘的衝動に、この記憶の権限に、いかにしていついつまでも残るような或るものが烙印されるのか?」...このきわめて古い問題は、誰もか解決しようとして、必ずしも、しなやかな答と方法で解決されていないのみならず、おそらく、人間の先史時代の全体を通じて、人間の意識界へと怖るべく不気味なものとしてなかつたかもしれない。「何かを烙きつけるということは、これを記憶に残すためである。苦痛を与えてやまないものが記憶に残る」これこそが、地上に刻する最古の...心理学の根本命題なのである。今日なお地上において、人間や民族の生活のうちには、厳密、秘密、暗黙の色合いなどがあるとどこにでも、かつて地上にいたるところで約束や抵当や契約につきものだった恐怖の何れかが影響を残している、とさえ言うてよいだろう

(428P)... (記憶の永続性によって理性が空虚し、こうして本能の欲求を叶える事が困難となり...これらの本能は、新しい・よりむしろ地下的な欲求満足を求めざるを得なくなったわけだ。外に向かつて発散されず、内に向かつて、私と呼んで人間の内面化というやつである...敵意、残忍、迫害や毀滅や愛恨や破壊の喜び...これらすべてが、こうした本能の所有者自身へと方向を転ずること、これこそが「良心の疾しさ」の起源なのだ。外部の敵や抵抗がなくなったこと、いやでも習俗の押し付けられるような狭苦しさや拘束の状況が押し込められた人間は、いらだちて己自身を引き裂き、責め立て、噛みかじり、かきむしり、いじめられた。「飼育され」ようとしているところの、おのれが檻の格子に身を打ち付けて傷だらけになるこの歌(463p)

ニーチェにとって、こうしたキリスト教的反自然状態からの脱却は、超人間の生成であり、個人主義的で、哲学的なレベルを越えるものではなかつたため、その提唱は批判したか?彼の宗教分析で見られる道徳の発生と記憶の内的起源の解明は注目してもよいと思う。ニーチェの観点からクラインの理論を透視すると、クラインの理論がいかに宗教的構造で満ちているか判然としよう。但し、記憶の永続性とその機能については両者の見解は一部共通で、他は異なる。

精神分析にとって、不快な記憶が抑圧されるのだった。そして不完全な抑圧が定形形成の一翼を担う。抑圧する主体は自我、つまり個人である。この主体はニーチェにおいては社会的・宗教的債権者として、社会的に抑圧が形成されると説く。抑圧の主体が個人にせよ、社会にせよ、いずれにしても抑圧の結果、本能、不快な記憶は無意識のレベルで永続し、無時限的な性格を帯びるとする。但しここで決定的に異なるのは、精神分析の場合には、不快な記憶に対する自我あるいは超自我からの防衛として抑圧が発生するとされるのに対し、ニーチェは、抑圧の結果、良心や道徳が発生し記憶が永続化している点である。ニーチェ説をとった場合、抑圧の戻りなどのように破壊されるのだろうか。

6 抑圧論の解体:既にフーコーによって(『性の歴史』)抑圧の戻りは解体されている。

近代社会の特徴とは、性をして閉の中に留まるべしと主張したことでなく、性について常に語るべしとの使命を自らに課したことである。性を秘密そのものとして評価させることによってだ(『前掲書 第一巻』46P 新潮社)

民衆文化から、あるいは宮廷の公然たる性的遊びから、性を慕奪し、私的に場をこ、宗教的な秘密に、憎むべきものとして追放するようにブルジョア社会は宣言する。性の言説を禁止しながら、強要すること、性の社会的評価を変えること、性を私的な、医学的な空間で開放すること、これが歴史的なプロセスだった。こうした社会的意識の確立によって、子供の目には性の解放が特権とされ、秘密の王国となる。換言すれば「子供」が誕生したのである。抑圧の戻りが解体すれば、抑圧論に基づく定形形成論も、夢理論も成立しなくなる。さまざまな恐怖をもちながら精神分析は、精神医学のなかで最も系統的かつ包括的に精神現象を解明しようとしてきたものではなかつたか。だが、彼らの言説をある種の宗教的・政治的構造の中で起こる意識的現象の叙述と捉え返し、定形形成をそれらの上部構造との矛盾とすれば、精神分析の成果を継承できはしないか。例えば、ヒステリーは、古典的な精神分析流に定義すれば、心的葛藤(主に性的な)が身体定形に「轉写」したものとされる。ここに前提されている心身二元論を排除して、身体的な習得的行為を、道徳的・政治的・神聖的ブラティックと捉えれば、ヒステリーが、この神聖的ブラティックの維持と拒否を同時に実

現していることが分かる。例えば、反抗すれば罰金を行使できる立場にある上司に対する怒りの手が麻痺する、等、強自解離症の患者は清潔さへの異常な執着、「汚い言葉」が浮び上がってくること、儀式的行為、等については、既にジュリア・クレルゴンの「自由・平等・清潔」(河出書房新社)を紹介して、その起源がブルジョア権力の正当化にあることを見ておいた。

実際には、身体衛生の歴史は、ある種の習俗的行動の歴史である以上に、まず政治史の一部なのである。権力は、身体衛生を人類の絶えざる進歩の保障と考えたが、といっても進歩とは、既存の社会構造を前提とする進歩である。精神医学の精神科はこの権力と手を結んで、ある種の道徳的・社会的秩序の導入を正当化しようとした。それは種の退化という強自観念が支配していた一時期に、人類という資本を保護するという形で進められた。清潔さは、有機的秩序の指標であると同時に、意識の秩序を示す兆候であると考えられるようになる。勝利したブルジョアジーの価値観が支配する社会において、清潔さは新しい身体道徳を象徴するものになる。というのも清潔さは、労働者階級が責任感を見につけるのに役立つからである。一言でいえば、清潔さは、制御できない細菌を運ぶ媒介者を取り除き、死をもたらす無秩序を廃し、有害な精神を根絶やしにすることによって、既存の社会秩序の再生産を可能にするのである(286-7P)

強自解離症の患者は、思考と身体が清潔へのこだわりに対して苦しんでいる。つまり、彼らは自分の所属する社会的領域を既存の形態のまま再生産する責任を持ち、参加することに、これ以上耐えられないとコミュニケーションしているのだが、自分ではこの社会が最善であると信じこんでいる。無秩序と時間の侵入と自己の退化に対しては彼らの感受性は鋭くなっている。余計に彼らは既存の秩序にしがみつく。歯の治療をためらっていた初老の強自解離症の女性は、半信半疑の歯科治療を受けさせてから、他人の手の汚さに対する意識が少し薄れた。老けへの恐怖が、時間への恐怖が、薄らいだのだろうか。過食と嘔吐を伴っている強自解離症の女性は、過食のコントロールができないとパニックになる。過食自体の苦しみよりも、そのコントロールができなくなった自分に失望している。彼女はあらゆる対人関係をコントロールし、自己の生活の秩序を乱すものを排除しようとする。しかし何のための秩序維持なのか自分でもわからない、という。彼女は時々、海外に旅行するが、その時は不思議と過食もなくなり、食事を「楽しむ」他人との交流ができ、内面ばかり向けられていた関心が外界に向けられ、花花を見て感動するという。幼馴染からの父親との長い電話があるのだが、ようやく彼女は忘れていた父親とのコミュニケーションを始めようとしている。

こうした社会学的考察、事例を見ると、精神分析でいわれるような、強自解離症特有な防衛機制をここに探求しても無駄に思える。広場恐怖については、イーバー・ツァンク空想論の立場から説明を加えているので、そちらを参照して欲しいが、近代都市の進展は、コミュニティーの解体、私的領域への個人の封じ込め、肉体的・精神的コミュニケーションの分断を伴い、イデオロギー上でも、依存する人間を未熟とみるから、「自立」した大人は、一人で、この遊覧のような空間に立ち向かわなければならない。マッチョの長距離トラック運転手に、広場恐怖(特に、高速道路や、交差点で非常な不安の)パニックにおそわれるカザルに多いのである。

最後に、精神科における「現実からの離反」と幻覚形成との関係についてのフロイトの解説を踏まえてみる。既に述べたように、フロイトは精神科における現実からの離反を、外的現実ととっていた。それに対して、われわれは「現実からの離反」は、自我の分割的解体して、他者との媒介が喪失し、自己の現実が喪失する結果であると推論した。以下のフロイトの文章において、「現実」としてあるタームを自己の現実と読みかえると、示唆的となる。

精神科においても二つの段階が明瞭になり、その第一段階は自我をまず現実から引き離し、第二段階は傷を再び良くしようとして、現実との関係をエスの機能の上で回復するのだと予想されるだろう。精神科において現実の修正は、今までの現実に対する関係の精神的な脱離について行われる。つまり、今までに現実から遠ざかってきた、またそれによって、現実が精神生活の中で代表されてきた理想の痕跡や表現、そして半信半疑について行われる。しかしこの脱離は、根絶されたものでなく、つい新しい刺激によって豊かされ、変化させられる。かくして精神科にとって、新しい現実と合致するような知識を与えるという課題が作られ、これはもともと根本的に幻覚という方法で到達される。精神科の多くの型、多くの例で理想化、妄想形成および幻覚が苦痛な性質を示して、不安の発生と結びついていて、それは全般的な過剰に抵抗する力から現れている事象の現れである。精神科でいつも不安を持って反応が起り、しばしば抑圧された感情が暴発をおこし、葛藤の結果は過剰に過ぎず、満足しては不完全であること

と分かる。おそらく精神科で現実の拒絶された部分が、精神科における抑圧された感情のように、いつも精神生活に転換させられるのだろう(『著作集 6』318p)

ここでのキーポイントは、理想化、妄想形成、幻覚形成が、根絶させられる現実から現れさせるために苦痛な性格を帯びるという部分をどう再構成するかである。

ある男性が予後不良の抗がん剤心不全のため死亡(入院した。彼は自分の病状の予後の悪さを知っており、透折で生命を維持しつつ死を待つための運命である。透折のためのシャントを作った夜、彼は色々な虫に刺されていると訴え、死人が現れると怯え、診察時も、しきりに足こいている虫をとろうとしていた。42才で死ぬのは辛い。透折は地獄への通路に見えたのだろう。彼はそれまでの会社生活、私生活、家庭生活を失いつつある。しかし解離の意識が、これまでの彼の生活の記憶、「理想物の沈黙」や、新しい刺激が、幻想的対象物として対外的に疎外して形質を失われ、その苦痛は隠へいされると同時に実現する。彼を苦しめるのは、内的不安から彼の肉体を蝕む虫や、彼を襲う幽霊に転化したのである。睡眠作用の強い抗うつ剤と抗不安薬によって、彼はこれらの幻覚から二夜にして回復したが、われわれは彼の本当の苦しみを理解し、支持する義務が残っている。

メラニー・クラインについて評注するつもりで、脱線ばかりしたが、主要な目的は、現在、精神科書や精神科の解釈に広く採用されている「抑圧」と「防衛概念」の妥当性を問うことだった。教条的な理論が事実を説明できないとすれば、オルタナティブな理論を提示する必要があるが、そのオルタナティブもたえず批判的観察によって検証・修正していく必要がある。これは自戒である。

なお、メラニー・クラインの影響を受けているラカンも、実際の臨床では一部の人が採用しているにすぎないので、ここでは無視する。

追記 フレデリック・クロウズは、New York Reviews of Books, 1994, num19-20において、「抑圧されたものの復讐」と題して、ここ10年程、アメリカ全土を襲った、ラディカル・フェミニストによる記憶回復運動に関する著作、それに対する批判的著作、その運動全体の経過を試みて、その中で「抑圧概念」の曖昧さを指摘している。この10年ほど、アメリカでは、ラディカル・フェミニストたちによって、主に女性に対する幼児への性的虐待の問題がクローズアップされてきた。歴史的に見れば、そのような運動が起ることは当然だったが、彼女たちのコレクティブの内部で、次第に幼児性虐待をうけたと告白するケースが増えるにつれて、バス、テレビからの指導者は、児童に対する性的虐待のケースは低く見積もられすぎていると確言するようになり、フロイトの流義にしたがって、心理的に抑圧された被害者の記憶回復運動を開始した。しかし彼女らは、文学者であり、フロイトが抑圧概念をためらいながら確立して行った過程など知らなかったし、普通の心理学的素養ももっていなかった(と自分で公言している)。狭量だが、教条的信念に燃えた彼女たちは、次々に女性をささって、彼女たちに、幼児期の虐待の再生を促し(その方法が後で述べる)、父親達を告発させた。直接関わりをもっていなくても、アメリカの約255000万人の精神科医のうちで、彼女たちの言い分を信ずる人は50000人に達する。ドラーキンによれば、アメリカの父親の半数は、自分たちの娘が虐待であることをたたきこむために虐待を行っているということなどで、道でそれらがたつた女性に、あなたに幼児期の虐待を受けたことはいないと、示唆することはたやすいことである。彼女たちによれば、性的無関心、乱交、「他人と少し違った感じ」を経験してしまえば、それは立派に、幼児性虐待を受けた徴候となるのである。その虐待が成立するためには、単なる言葉や無邪気な接触、懐しすぎる育児、眼による交流のしすぎで十分である。こうして、多くの父親が娘の「よみがえった記憶」によって疑われ、刑務所に送られ、家族の絆が破壊され、多くの悲しみが生まれた。フェミニストのテールが、証言者として関与したジョージ・フランクリンのケースでは、彼の娘(アイリーン)が父親を、「よみがえった殺人の記憶」をもとにして告発した(1989)。それによると、父親は、1969年に、彼女の親友をフォルクスワーゲンの車の後部座席でレイプし、その親友の頭部を石で砕いて殺し、丘に埋めたという。しかし、警察がその車を詳細に調査しても具体的な証拠はなく、もう一人の娘が父親のアリバイを証言した。にもかかわらず、陪審では、彼は有罪とされ、州立刑務所に終身刑に服する事になった。テールの証言と、アイリーンの証言をたどる鮮やかな記憶(友人が殺されると、指論が外れた、等。しかし、後でわかったことが彼女が証言してなかった)、更に友人の殺人のアレゴリーのようにアイリーンは毛をかきむしってほとんど頭が裸になった等のために、通常の裁判の手続きが省略されてしまったのである。そして全米の裁判所も、子供の証言の有効性を認める条文を拡大解釈する傾向にあったので、その判決を覆すことはなかった。しかし、そのような行為をした父親と、なぜ、その後も幸福にしばらく暮らしたのだろうか。なぜ事件の後に、その後も繰返して暮らしたのならば、精神科的な症状を示さなかったのだろうか。なぜ、友人が殺されそうになったときに、抵抗の行動をしなかったのだろうか。更に、煽動者テールは、アイ

リーンは心理的マインドをもっていなかったと証言しているが、実は彼女二人の精神分析医にかかっていたのである。その一人バレットによれば、彼女は催眠と自由联想によって徐々に「記憶」を拡大していった。バレットは、フロイトに忠実にその現実か空想かは重要なことではない、と言いつけたが、最後に彼女は「何か私をぶった」と言い出し、その後、懐疑的に興奮した時期に、あれは父親だったと断定し、それは事実であると決めつけたのである。バレットの証言は却下された。言うならば、正統派の精神分析は新しい箱になったのである。第三に、アイリーンの夢防衛がたつという記憶も嘘であることが後に明らかになった。それは彼女の空想だった。アイリーンは、その後、精神療法家の間で、はやされ、ハリウッドで映画化の計画に同意した。

1993年には、警察官ポール・イングラムが、彼の二人の娘と息子を自宅で何度となくレイプし、妻に猥褻を強要し、多数の幼児を食へたという嫌疑のために訴追された。事の起こりは、ある宗派の神父が娘を訪れ、お前が強姦されたのだと告知したことにはじまる。彼女はそれを確信し、父親を訴追した。彼は厳しい尋問によって誘導され、二日目には現況「虐待の大部分」を告白した。もちろん、どの国でもやるように、他の証人が喋ったぞ、とか、カウンセラーによるなごめすかしが効いた。5カ月かかった尋問の中で、5人以上の心理学者がかわったが、結論は同じだった。彼は虐待者である。このケースの場合も、客観的証拠は何もなかった。娘や息子は、事柄の顛末について精密な人形を示され、どうやって強姦されたかを問われて言われるままに答えた。神父たちのコミュニティもその罪状を認めた。こうして、社会的な妄想が形成され、イングラムはその犠牲者となった。興奮剤のことで、裁判所が、有罪の保証を確認するために、カルトと洗脳の専門家、リチャード・オブシェを呼出したとき、期待に反して、彼はイングラムの告白と周囲の証言は、疑わしいと断言した。「私はあなたの子供さんたちと話してきました。それによると、あなたが強姦をしていたというその時刻、あなたはそれを見ていたということになる」イングラム自身はそれに反論した。オブシェが記憶というものを疑わしいものだと主張したとき、イングラムはそれにも反対した。その後、別のカウンセラーによって、彼は自分の有罪を否定したとき、既に判決は下り、嘆願書も却下された。

このような嵐のような数年間の間に告発されたケースの多くは無罪となったが、その裁判に要する経費は莫大であり、保育園のスタッフが幼児を虐待したケースでは証拠不十分のために告訴がとりざげられるまでに、米国の歴史の中で最も長く(7年間)、最も高価な(1500万ドル)の裁判が行われた。そうした過激な裁判の繰り返された後、ようやく批判的な動向が現れ始めた。その象徴は、「偽記憶症候群研究会」の設立であり、そのメンバーの多くに、かつて告発されたり、非難されたりした親や親戚が参加している。第二に、批判的な心理学者、社会学者の発言と著作が現れた。その一部の人々は、虐待裁判の喚問に取られたことかあるが、当該が告発に無視されたのである。彼(彼女)達は、第一に、精神分析を確立する前のフロイトの台座実践と現在の記憶回復運動の類似性を指摘する。フロイトは、魔女裁判からメスメリズムにいたる伝承を受け継いで、催眠によってヒステリー(この概念自体がもろい)と、彼《彼女》たちという、それによれば、ヒステリーは、探検や探偵の物語的利害関係と固く結びついていて、事実、初期のフロイトが扱ったヒステリーの患者の多くは、鉄道建設労働者で、事故にあった人々だった)を治療しようとしたが、彼らが多くの場合、幼時の虐待を隠しているのを「発見」して、「それを聞き、理解して、その恐ろしい出来事話させ」抑圧を解こうとしたが、不幸にもあまりにも多くの父親が虐待者とされ、家父長制の地位が揺るぐところまでいったので、フロイトは催眠療法を諦めた。勿論その間に、フロイトは多くの父親を告発したので、現在と同じ様な状況が生まれた。ともかく、フロイトは、その結果、精神分析の後退し、インセストの意図をクロテスクにも父親から子供自体に帰属せしめた。しかし、このエディプス・コンプレックスへのシフトにあたって、彼は何の確信的証拠も持っていなかったが、抑圧概念を創作することによってその難局を切り抜けた。しかし、既に彼の治療は実際には失敗していた。だが偉大なナレーター的素質のために、彼の著作などの精神分析のテクニクにも置いてある。結局彼は、患者の無意識の中に抑圧された性的欲求を帰属させて、それを思い出そうように強いた。これが抑圧の精神分析の誕生台座である。しかしすぐに彼は患者の語る物語が想像であることを知り、「心的現実」という概念を創造して、第二の難局を切り抜けた。だがこのようになると我々は「抑圧されたもの」を次のように定義せざるを得なくなる。「アクセスできず、おそらく存在しない精神的素材で、理論家ないし治療者が説明のために採用するもの」(クローズ) フロイトは、フロイト主義者になったあとでは、実際の性的虐待のケースについても子供を自衛被害者とみなしてほとんど同意しなくなり(例えば、ドラのケース)、治療よりも彼の望む読者に患者を当て、論文を書き、有名になり「夢分析」で彼は自分の夢を分析しているが、その中で彼は自分自身を野蠻なと断言している。当然それに加えてフリークスへの手紙を見よ、世の中に自分の理論を認めさせることに興味があった。想像と現実の区別を付かなかった初期のフロイトは、患者の口の端から、ペニスが入り込まれた記憶ごとい、消化不良や「吐しす感」は、幼児期、おしりに舌や指が差し込まれた事を意味

し、足が麻痺するのは、年上の女性から性器を刺激することを要求されたことを意味するとした。反対に現実の虐待のケースを扱うに当たっては、恐怖、道徳的混乱、アイデンティティの崩壊に与するよりも、症状と幼児期の性感帯の刺激の関連について長々と論じた。彼自身の言葉によれば、「作業を中止しても、継続しても、患者にはなんの变化も起こらなかった。彼らのいうことを信じてはならず、いつも彼らから何かを隠している」と仮定し、それを告げるべきである。これを主張し、何かか語られるまで任力をかけ、自分の証言を示すべきである。又記憶回復した後で、何かか変わったが、それを吹き込んだのはあなたです、という患者もいるが、彼に対しては、それは記憶が回復されることに対するあなたの抵抗であり、弁解であると説明し、全てを承認させなければならぬ(例えば、少年ハンスは、幼児期の自分の記録と論文に抗議したが、フロイトは勿論これを抵抗として一蹴した) 現在、記憶回復運動を推進しているルネ・フレデリクソンは同じように、「機能的不信の存在は、その記憶が事実であることを示唆する」と言い、他の人は「記憶回復こともない、症状が悪化するのが普通だが、それはまた記憶が完全に回復してない証拠だから、もっと圧力をかけるべきである」という。テールの事例では、一年にも満たない幼児が80年後に、サディスティックな母親が父親を浴槽に沈めたという記憶をスナップショットのように再現し、その時「淡い灰色の壁と、すえた匂いを感じた」と述べたとき、それを無批判に受け入れた。彼女は記憶の発露についての現在の知見に挑戦しようとしているのだろうか。だが彼女のいうことはフロイトの事例と似ている。11ヶ月の幼児が、成人になってから、当時、二人の大人が誘惑的言葉を交わしているのを見て、それがまるでレコード・プレーヤーから流れてくるようだったという話を、フロイトはうのみにして、ママやパパと喧嘩したり、遊んだりしている幼児が大人の会話をレコードのように記憶していることをフロイトがうのみにして、彼の軽信のベストワンに入るに違いない。

ベンダグラストによれば、結局、精神分析は悪魔学に堕したのである。それは心理学的に未知なものをアレゴリー化して、暗黙の力と見做し、それをなぞめたり、批判し、チェックする。魔女裁判、メスメリズム、催眠(最近アメリカで再び盛んになってきた)、の歴史が再び繰り返される事になった。ラティカル・フェミニストたちは、自分で自覚することなく、魔女(しかし現在の魔女はほとんど男性が)の裁判を執行しているのである。

抑圧概念と精神分析的記憶概念自体を疑う著作も彼女たちの運動の評判を落とすことに貢献している。これまで、実践心理学者たちが、抑圧を実証するには、変数をコントロールして、データの他の解釈の可能性をすべて除外することが必要であると主張してきたが、精神分析家(バス、テール、テイビス)のような権威あるケースだけでなく、正統派な精神分析家を対象にしては、臨床経験が裏証しているという答を繰返し、それで通ってきた。しかし、臨床経験を半断するのは、精神分析的概念のためだから、その前提が誤りであれば、全ては無駄という事になる。彼らの治療が成功しなかったとしても、それはせいぜい抑圧との両立可能性を示すだけで、その存在を立証することにはならない。

テイビット・ホームズが60年かけて研究した結果、彼は「抑圧概念を支持する実験的データはなかった」といっている(もっとも、臨床経験を重視する精神分析家はこの主張を無視するだろう) コントロールされた対照されたデータに依拠せずに、自由にこの概念を駆使できるとすれば、それはオルゴンとか、神秘的な生命力を信仰するのと同様、抑圧概念への依拠は神を信仰することと同様である、とロフツスは言う。

記憶回復運動の敵とみなされている心理学者ロフツスは、その著作「抑圧された記憶の神話」において、別の記憶論を提出している。彼女によれば、出来事のリコードが脳の特殊な場所に蓄えられ、それから急速に完全に蘇るという記憶回復者の反応は誤りであるという。神経科学によれば(実証主義的ではないが)、記憶は曖昧で、再構成的で、非局所的で、その記憶が楽しいものだろうと不快なものだろうと、それは時と共にドラスティックに破壊されるが(先にも引用したニーチェの意見と似ている)、問題の経緯が定期的にリハーサルされる時には、その破壊はより少なく(この指摘は一回の虐待を突然思い出すというテイビスらの仮定と逆である) 更に、他者の介入と支持がなければ記憶は容易に壊れ(集団的記憶の正確さについてのミドルトン、ハヴァーの著作を参照せよ)、ついで過去の感覚を現在の感覚に順応させるという回顧的バイアスがかかる。だから過去のフラッシュバックは信用性も乏しい。ブラウン大学教授のロス・チェイトの性的虐待のフラッシュバックの場合、電話で確かめたところ、彼は自分自身がベドフィリア(児童愛者)であり、ベドフィリアについての本を読んで道徳的反省をしていたときに、その記憶が「強烈」(これは実は覚えがたい)されたといっていた。

それでは、記憶回復者の記憶は何に基づくものなのか、ロフツスは、その原因の一つとして、暗示、示唆を仮定している。更に「自由」を強要され続けた場合に陥るアイデンティティの混乱、精神被害がある。「抑圧があるところには、暗示がある」。継続するとその結果、病状は更に重くなり、自殺の危険性が値まり、人生を楽しめず、感傷おぼれ、現実の記憶が昏色されるから、現実との接触が失わ

れ、精神障害者になり、家族関係が崩壊される。しかしティビスは「この暴風を乗り越え、怒りの日々をおくりなさい」と。

催眠と暗示療法の研究の専門家であるオプシェの『怪物を作る』という著作では、この記憶回復運動を「暴力的で心理的拷問」であるとしているが、更にハリウッド、メディアや裁判で問題になっている多重人格(MPD)の概念にも疑問を呈している。多重人格の人々の問題は、多くは封印がらみで明らかになる。「私の中の別の人格が犯罪を犯したのだ」というわけである。オプシェは、主に催眠療法士から学んだ行動パターンであり、その病状は自分でしばしばサタン信仰者、陰謀的な知識を信じており、患者に辛い体験を思い出させるのみならず、この体験からの逃避と思われる解離された自己を実現させるのである。すなわち、MPDは、医源病である。クロウズによれば、米国精神医学協会が、昨年改訂した『精神障害と分類と診断マニュアルIV』では、MPDが、解離性アイデンティティー障害と再規定され、協会内部でも注視していることを窺わせるが、協会の支配的地位にその概念を信奉する人々がいる限り、彼女らのような徹底的批判を受け入れられることは期待できないという。

クロウズの提論は、主にラディカル・フェミニストによる記憶回復運動をめぐるものだが、粗野なティビスらは自ら「心理学の素養がない」と公言していた。しかし、一方で、記憶に関するロフツスの主張を攻撃するときには、心的外傷を受けたときには「記憶の新しい封印が形成される」という、臨床経験からの実証という悪魔界から抜け出すことなしに、どうして、この「新しい封印」が妥当とされるのか。しかし、このようなインテリゲンチアにも、クロウズは彼女らの運動の根をもっと深いところ、すなわち正統派精神分析に求めている。彼らは互いに抑圧という概念を共有しているのである。クロウズは古典的精神分析の主要原理を次のようにまとめている。1. 精神病に健康になるためには、最も苦痛な過去を生きなおすことが必要である。その真実が辛いほど、われわれは幸福になる。2. 自分の精神病の問題について正確に同定できるのみならず、自分史の正確な再現が可能となる。3. 我々の精神は、無意識のレベルで作用する部分があるが、そのレベルは独自の操作原理を持つ。4. 体験した全てのことは意識か無意識のレベルに蓄えられる。5. 抑圧内容は主に性的性格である。だから性的体験は抑圧に敏感であり、精神生活の主要な決定因となる。6. 抑圧された、無意識は、現在を生きようとする努力に反対して、我々を支配する。7. 症状とは、「特殊な外傷的体験の残り物、記憶の象徴」であり、それらをサインとして解釈することが出来る。8. その再構成の作業は、症状が、比喩的比喩的な意味をになうために容易となる。9. 以上から、心理的問題を取り扱う最も効果的方法は、患者の現在の苦境、無能力でなく、非常に早期におこった抑圧を同定し、取り除くことである。クロウズは、これらすべての主張を疑わしいとする。しかしナーゲルは、これらの考えが次第的に受け入れられていることを根拠として、その主張は正しいとする。彼は、1690sの魔女裁判の大衆生かもたらした悲劇と同様、1990sの運動の大衆生かもたらした悲劇を見極めたら、考えを変えるかもしれない。

現在、多くの批判的視点まで、この記憶回復運動の問題が議論されている(『記憶の政治』人文学の歴史 vol 7 no 2 1994など)。事象が理論的レベルでのことではなく、裁判、賠償、などの利害関係が絡んでいる。保険会社は、精神分析に疑いをかけはじめ、支払いの基準を改訂しようとしている。精神分析サークルは、社会から後退し、ベジミスティックになり、自分たちの実践をものはや台座と呼ばれなくなった。今や精神分析かもてはやされているのは、西欧の暗示にかかりやすい日本だけではないだろうか。1930に犯罪者に口を割らせるために無期限の拘禁を主張したラカンが精神分析の最前線と呼ばれた国なのである。隠微派のポール・マクヒューは、ホプキンス医学研究所の精神医学、行動科学部門のディレクターだが、長期にわたる精神医学内部の闘争を要約して、経験主義とロマン主義に分けている。前者は事実を方法論的に厳密に研究し、後者は、証明のために感覚を、実証のためにメタファーを、ガイダンスのために無感と神話に依拠する、としている。彼の意見では、既に経験主義が勝利をおさめたのであり、その理由は、現実世界で直面して検討することによって、自分たちの約束を実証し、具体的な訴えに対する治療を証明したからである。マクヒューの意見は当を得ているが、我々はいっと前へ進むべきだろう。

「問題は生を解釈したり、説明することではなく、生を拡大することである」

(シチュエーションニスト・インターナショナル)

10/1/95

間主体態の論理(1)

安藤一夫

間主体態とは間主体性とか間主観性とか訳されている。フッサールが提起して以降、現象学の主要テーマの一つである。これは個としての主体と主体との間の関係をどう捉えるか、という問題であり、現象学は今日に至るまでこの難問を解決できていない。

ところで脱物象化をめざした協同主体の形成を解明しようとする際、主体と主体との間の関係を捉える方法論を確立しておくことが必要となる。現象学の成果がたよりにならないとすればこの課題を解決するために役立つ理論が他にあるのだろうか。

このような問題意識で、とりあえずマルクスの関係論と反照の論理、及び形態規定の論理を再読することから始めよう。

第一章. 関係、反照、形態規定

(1) 関係とは何か

「諸関係というものは、総じて、それらが、たがいに関係しあっている諸主体から区別されて、確定されなければならないとされるばあいには、ただ思考されることが出来るだけだからだ。」(『資本論草稿集』4巻116頁)

マルクスは『経済学批判要綱』として戦後出版された研究ノートで、A、B二つの商品の交換関係を考察し、この関係で等しいものは、AでもBでもない第三者であり、この第三者はある一つの関係を表現しているから頭の中の表象として存在している、と述べたあと、このように、関係それ自体は思考されることが出来るだけだ、と述べた。これはおそらく、関係として表現されるものが、抽象的なものであり、人間の感性では捉えられない超感覚的なものであるからなのだろう。

関係をたがいに関係しあっている諸主体をも含めて理解しようとするならば、それは一つの形態として存在している。従って、二つの商品が関係している、という経済的な関係の内容は、この経済的な形態を分析するところから導き出されねばならない。

形態はおのずから内容を決めている。その経済的形態のうちに形態規定を発見すればよい。ところがそうしようとするならば、諸主体は関係の項となり、両極となってしまふ。ここではヘーゲルが磁力について述べている両極性の論理が働く。

「両極は、一本の実在的な線の感性的に現存する両端である。しかしこれらの極は、極としては、感性的な、力学的な実在性を持たず、観念的な実在性を持つ。これらの極は分離することが全く不可能である。」(ヘーゲル『エンチクロペディー』河出書房新社、253頁)

先にマルクスが、関係を両極から区別し、それ自体を確定しようとするならば、それは単に思考されるだけのものにしかならない、と述べていた。そこで、関係する諸主体をも含め、関係を一つの形態として想定し、形態規定を発見しようとするならば、今度はヘーゲ

ルが、両極は感性的な実在性を持たない、と言う。

外的素材はなくとも論理を展開していく観念論とは違い、感覚的に確かめうる外的素材を分析しようとする唯物論にとっての困難が現れる。二つの商品の経済的関係について、関係そのものを分析しようとするれば抽象的となり、ついで両極を分析しようとするればそこには観念的な実在性しかない、というのである。

(2) 反照の論理

では関係を把握するにはどうすればよいのか。関係の論理学はありうるのか。関係の論理学は反照（リフレクション、反省、反射とも訳される）の論理学であり、マルクスが明らかにした形態規定はヘーゲルの反照論を完成させたものであって、これこそが弁証法の核心をなしている。このことを明らかにしよう。

ヘーゲルは相互に独立したもの同士の関係における反照の論理を次のように展開している。

「両者がそれぞれ自分は他者ではないという形で向自的にあるのだから、両者はそれぞれ他者の中で照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立規定であり、これによれば、区別されたもの（両者）は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独自の規定を他者への自分の関係の中のみ持つ、そしてそれが他者へと反照させられているときじつはただ自己へと反照しているにすぎない。そして、その他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者固有の他者なのである。」（『エンチクロペディー』131頁）

ヘーゲルの論理学の本質論では反照の論理が駆使されて、本質が何であるかを展開していく。反照の論理は本質の展開過程で様々であるが、論理としてとりだすならば、ここに示したものとなる。

ヘーゲルにとっては、論理学で対象となっているものは思考である。従ってそれは直接的には外的対象にとっての論理ではない。とはいえヘーゲル論理学の特徴は、それが思考を対象としつつも、その概念を客観化するものと捉えているところにあった。従って、伝統的な論理学とちがひ、対象の論理をもそのうちに組み込んでいた。

だから、対象に則して反照の論理を展開しようとするとき、ヘーゲルの論理には弱点が現れる。それは形態の規定をどう捉えるか、というところである。

ヘーゲルにとって本質的なものは関係であると捉えられてはいても、それは思考と思考との関係であった。従ってその反照にもとづき、現象が生成され、一つの形式が出現したとしても、それは本質の形態でしかありえなかった。ところが思考とは異なり、外的素材が関係を結ぶと形態が二重化してしまう。外的素材は新たな形態によって形態規定され、本来の自然的質の他に新たな質を持ってしまう。ヘーゲルに欠けているものはこの形態規定の論理である。

(3) 形態規定の論理

商品A、例えば上着は使用価値である。これと商品B、例えばテレビが関係させられ、1着の上着＝一台のテレビ、という経済的関係が成立しているとしよう。

上着は使用価値としてはテレビと異なっている。上着ともテレビとも異なる第三者がこの関係を取りもっているのだが、それはただ思考されることができるだけである。マルクスは社会の中で成立している抽象的人間労働がこの第三者であることを発見し、それを価値の実体と規定したが、それ自体は思考産物でしかなかった。

ところが、上着とテレビを両極とする価値関係を考えると、両極が反照しあうことによって、先の思考産物が実在的なものに転化される。このときヘーゲルは両極が観念的な実在物になることを心配していた。マルクスが発見した形態規定の論理は、ヘーゲルの心配を杞憂とした。

「上着価値のテレビでの表現は、テレビそのものに一つの新しい形態を刻印する。……テレビはいまやまったくそのありのままの姿で、テレビというその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換の可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態を持つ。」（『マルクス経済学レキシコン』11巻、27頁）

二つの商品がとりもつ関係を表している形態が、それぞれに新しい質を与えることが形態規定の特徴である。両極にそれぞれ新しい質が与えられる、ということは、従来の質が観念的な実在物に転化されることを意味している。この点でヘーゲルの心配は当たっていた。しかし、両極が新しい質の形態として形態規定されていることを知れば、両極は二重物になった、ということであり、感性的な実在物が、超感性的な質を形態規定によって新たに獲得した、ということなのである。

反照の論理が形態規定の論理と結び付けられることによって始めて、外的素材同士の関係が解明しうる。双方を結びつけた例が、マルクスの商品論なのである。

「われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間の労働力の支出として商品価値で評価される限りでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働を前の形態で考察するときには、あとの形態では考察しないし、あとの形態で考察するときには前の形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのずからたがいに分かれるのであり、したがってまたたやすく見分けられうるのである。商品の商品に対する関係の中にだけ存在する価値形態の場合にはそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用的労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと一つの二重物、すなわち使用価値及び価値、有用的労働の生産物及び抽象的な労働凝固体である。

それ故商品は、自分が商品なのだということを表すためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいて始めて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用姿態、その自然形態である。ところで、一商品、例えばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだが、それは、なにか他の自然形態を、他の一商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。」

(同、31～2頁)

商品の価値関係にあっては、等価商品の使用価値が形態規定を受けて、別の質である抽象的・人間労働の現象形態となること、このマルクスの発見を理解できている人々が何人いるだろうか。

(4) 鏡の比喩

マルクスは二商品の価値形態に形態規定の論理を発見し、主としてヘーゲルによって展開された未完の反照の論理を仕上げた。等価形態にある商品が、その自然的形態のまま、その反対物たる抽象的・人間労働という社会的・一般的なものの現象形態になる、というこの論理を解明したところでマルクスは興味のある注をつけている。

「見ようによっては人間も商品と同じである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間の中に自分を映してみるのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって、始めて人間としての自分自身に連関するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体は、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態として意義をもつのである。」(『資本論初版』)

ヘーゲルにこのことがわかっておれば、『精神現象学』の展開もずいぶん変わったものとなったであろう。もっともマルクスがここで用いている鏡の比喩についてはスミスが『道徳感情論』ですでに使っていた。

「もし、人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種とのなんの交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、彼は、彼自身の顔の美醜について、考えることができないであろう。これらすべては、彼が容易に見ることができず、彼が自然に注視することがなく、それらにたいして彼が目を向けることができるようにする鏡を与えられていない、諸対象なのである。彼を社会のなかにつれてこよう。そうすれば彼は、ただちに、彼が前に欠如していた鏡を与えられる。それは、彼がともに生活する人々の、顔つきとふるまいの中におかれるのであって、その顔つきとふるまいは常に、彼らがいつ彼の諸感情の中に入り込むか、いつ彼の諸感情を否認するかを、表示

するのである。そして、ここにおいてはじめて、彼自身の諸情念の適宜性と不適宜性、彼自身の精神の美醜を、眺めるのである。」(筑摩書房版、181～2頁)

スミスもマルクスも同じことを述べているが、スミスは文字通り鏡の比喩としてしか展開できていないのに、マルクスの場合、ガラスの鏡とは異なる人鏡の論理を解明している。そうだから、この論理は、ヘーゲルの『精神現象学』の承認の論理をのりこえるものとなったのである。

(5) 弁証法の核心

弁証法とは何か、と言うと、エンゲルスがまとめた三つの法則があげられる。

「量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則。」(『自然の弁証法』1、国民文庫版、65頁)

ここには反照の論理も形態規定の論理もなく、従って関係の論理がない。しかし、関係の論理こそ、いまだに哲学者たちがつかみあぐねている当のものであり、ここにこそ弁証法の核心がある。

自然物が関係の項となることによって社会関係に入るとき、形態規定によって自然物が二重の質をもつ。問題は形態規定によって与えられる新たな質が何であるかを発見することであり、その抽象的なものがその関係の両極の反照によって抽象されていることをつきとめることにある。

そうだとすれば、両極の反照による抽象化、つまりは総合による抽象が弁証法の核心だ、ということにならないだろうか。このように捉えることによって、思考と存在とをつなぐかけ橋として弁証法を位置づけることが可能となるのである。

第1章 何が課題か

1) 光と影

千里山生協は世話人会を軸とした共同購入を全国の生協に先駆けて実践してきた。新しく配送センターを建て、事実上の事業開始となった68年9月1日、50班、340世帯だった組合員は半年後の69年3月にもたれた再建総会時には3倍増の8、000世帯へと急成長し、総会にも3、000名の組合員が出席するというパワーを見せつけた。

ところがその後一転して、組合員数でも、事業としても伸び悩んできた。関西の少数派生協運動が新しい展開を見せようとしている今日、千里山生協にも長期間の低迷の原因にメスを入れ、事業と運動をたてなおそうとする動きがあると聞いている。このようなとき、千里山生協の拡大の時期に政治運動を担い、88年からあらためて協同組合運動に取り組んできた者の立場から問題提起をすることが要請されていると考える。

2) 三つの世代

まずはじめに問題を整理しておこう。

今日の少数派生協の出発点は60年代中葉にまでさかのぼることができる。この時期に生協運動の担い手となった人々を第一世代としよう。彼らは大学生協の経験はあったが、地域生協は未知の領域であった。

第一世代の努力で地域生協が主要都市に形成されたが、その形成過程で現場で働いてきたメンバーのうちから第二世代が形成される。第二世代は急速に拡大していった組織に自信をもち、それまで空白であった地域生協の事業と運動についての定型化をなした。70年代前半に、この世代が形成されたが、この世代にとって不幸だったことは、遅れて設立された市民生協に組合員数と事業規模で追いこされてしまったことであった。先駆者であり、多数派であった地位から少数派への転落という現実を前に、第二世代はどのように自己形成すべきであったろうか。

ところが市民生協が多数派となり、順調に伸びていっている頃に、すでに協同組合運動の転換が起きていた。レイドロウ報告に象徴される協同組合運動の新しい波がそれである。

石鹼にこだわり、地域にこだわり、産直にこだわり、働く場づくりにこだわってきた少数派生協は、この運動の転換によって、再び先駆者の役割を担うことを要請されてきた。

協同組合運動の新しい波を体現している世代が第三世代となった。今日、少数派生協の組合員の多数はこの第三世代となっている。

3) 総括の方法 (作業仮説)

この三つの世代論から千里山生協の歴史をかえり見ると、まず、第一世代が第二世代と結びつくことができなかつたことが判明する。第一世代が第二世代とうまく結びつくか、あるいは第二世代が自立して活動することが出来れば事業も運動も上向きになる。だがそれに失敗すれば専従組織が確立しえず、事業と運動は停滞する。

次に第三世代が登場してきたとき、第二世代がこれと結びつくためにはネットワークーとしての役割をはたすことが問われるのであるが、千里山生協の場合、担い手たちの間に第二世代が自信をもった集団として形成されてはいなかったため、運動の転換によってめぐってきたチャンスをとらえることができなかった。

第二世代が育った生協は生活クラブであり、ここでは第二世代が第三世代と結びついた。運動の転換に最もうまく対応したのはグリーンコープであろう。ここでは第三世代が自己を確立しているように思われる。そして、現在、関西の少数派生協に新しい動きが生まれている。その現実的根拠は何にもとづいているのだろうか。

この動きは社会変革の展望という見地から見るとき捉えられよう。第一世代も第二世代も、社会変革論としては、伝統的な政治革命論の枠内にあった。ソ連の崩壊によって、政治革命論の有効性が最終的に否定されているにもかかわらず、もう一つの道は定かではない。第三世代が形成され、自立しようとするとき、社会変革のもう一つの道を確認することが問われる。関西の少数派生協の新しい動きは恐らく、社会変革のもう一つの道が見えてきつつあるという運動の現状につき動かされているのであろう。

どのような形であれ、少数派生協は社会変革の必要性を訴えてきた。現在までに統合を終えた少数派生協と比較し、これから連帯を問題にしようとする関西の生協にとっては社会変革のもう一つの道を確認する、という点では有利な立場にある。協同組合運動の新しい波が要請しているこの課題にこたえることによって、関西の生協の新しい動きも歴史的に意義のある事業として語られることとなろう。この見地から、千里山生協の歴史を検討しよう。

第2章 第一世代の理論

1) 関大生協の地域化

千里山生協の再建は関大生協によってなされた。関大生協で地域化の路線が本格的に議論されるのは、65年になってからだった。

当時は大学生協が地域生協づくりを目指していた時代だった。60年安保闘争の後、大学生協に残っていた新左翼の活動家たちが生協運動の展望として、大学から地域へと描いたことは非常に自然ななりゆきであった。新左翼は60年には学生運動の分野でこそ影響力をもちえたが、労働運動や消費者運動には組織をもつことができていなかった。

60年安保闘争の敗北をバネに、より全面的な布陣を形成することをめざし、あらゆる戦線に入っていくこと、このことが活動家に求められていたのであった。

関大生協が地域化の路線を打ち出したとき、このような流れの先頭に立っていた。66年になると、地域化をめざした具体的な動きがでてきた。関大生協企画調査室を中心に『生協企画66』が矢継ぎ早に発行された。その6号に協同組合についての役割が述べられている。それを検討しよう。

2) 当時の協同組合論

今日の第三世代の人たちに、生協運動とは何か、と問えば、恐らく消費者運動だという回答はかえってこないだろう。ところが当時は消費者運動という位置づけが一般的だった。

「『協同組合運動』は『消費者運動』の中の一つの活動である。そして、この『消費者運動』と『協同組合運動』のちがいは『協同組合運動』が商品をあつかって、これをおとして消費者の生活擁護と消費者運動をおすすめる点にある。

地域生協は、地域の市民、勤労者を対象にして、この様な商品を取り扱って、消費者運動を進めようとするものである。」(24頁)

この時代の消費者運動は、労働組合運動や政治運動が運動として健在であったことに関連で、そのイメージがあった。人々は、職場で労働組合運動に参加し、また政治運動にも参加しつつ、同時に、消費者として、生活防衛をはかる、ということがその内容だった。そして、おのおのの運動はそれぞれ独自の役割を与えられていた。

消費者運動の役割は、真に貧困な階層が生活できるようにするという点におかれている。だから、消費者運動の一つの活動として協同組合運動を見た場合、それは中間層の運動となる。そうすると、中間層の運動がどうすれば、最貧層の利益を守る運動に役立つことができるか、ということが課題となる。

「だから生協とは、ある程度の生活が保障されている階層の『生活合理化』を目的とした団体として現実には存在せねばならぬし、その様な程度の意味をむしろ肯定的に認めるものである。そしてこの限界を一步でも出ようとする時、生協はもはや事業体を媒介とした生協としてではなく、事業体とは関係のない、社会運動の中に解消されていくのである。」(25頁)

当時生協といえば灘生協(現コープこうべ)だった。したがって、当時の灘生協を念頭において、議論がなされている点に注意しておく必要がある。その上で注目しておくべきことは、今日一般に語られている、事業と運動との両立という考え方が全面的に否定されていることである。このことは重要なので、もうすこし引用してみよう。

「『協同組合』の問題点は、真に生活防衛を必要としている階層を助け、この階層の利害を代表するには事業体をはなれなければならないという事である。この点は、『協同組合』が『協同組合』の枠を脱皮して、一般消費者運動や、労働運動や、あるいは、社会政治闘争という他の改良闘争の問題となるという事である。」(27頁)

ここでは協同組合が事業として発展していくことが、消費者運動の目的からはずれて

いく、という認識があり、他方で、消費者運動の目的を追求することは事業として成立しない、という判断がある。60年代ではこのような認識が誤っていた、というわけではなからう。時代は資本主義の高度成長期であり、経済成長がつくりだす種々の矛盾を緩和するシステムは形成されてはいなかった。さらに運動の転換を告げることとなる全共斗運動は数年後のことであった。

ところで、時代が変わっていけば、協同組合の役割も変化していく。このことを率直に認めることが出来れば、第一世代は第二世代と結びつくことができたはずである。しかし、第一世代には、現実を率直に認めることを妨げる社会変革論をかかげていた。というより第一世代の最も精力的な人々は、その社会変革論に忠誠を誓った上で、協同組合運動に参加していたのであり、協同組合運動の現実から学ぶ、ということには訓練されてはなかった。

3) 当時の社会変革論

(イ) 背景

50年代末に新左翼が登場するまでの社会変革論は、日本共産党の民族民主革命論であった。それは日本はアメリカになかば占領された半封建的な従属国であり、民族解放、民主主義国の建設をかかげた民主化闘争を闘うべきで、社会主義革命を目指すことは誤りである、というものであった。

朝鮮戦争時の消費ブームで、敗戦後の戦後復興をなしとげた日本資本主義が、新たな発展を始めたことを見てとった新左翼は、民族民主革命が時代おくれとなったことを明らかにし、社会主義革命を目指す革命路線を提起した。

その革命路線は、プロレタリアートの階級闘争が既成の国家権力を打倒し、プロレタリアートが政治権力を掌握する政治革命を先行させるというものであり、社会革命はその後に可能となるとされていた。

60年安保闘争は新左翼の革命路線を試練にかけた。民族民主革命か社会主義革命か、という日本共産党との路線論争では決着がつけられた。しかし、社会主義革命を実現するための戦術と組織を用意することはできなかった。

その結果、安保闘争終了後、新左翼は、大きくわけて戦術にこだわる党派と組織にこだわる党派とに分裂する。そして、関大生協は、戦術にこだわる党派の影響下にある人々が担っていた。

戦術にこだわった人々にとっての難問は、60年6、15前後に、30万人で国会を包囲する大衆運動がとりくまれながらも、それが、自民党政府を打倒する革命闘争へと発展しなかったことをどう総括するかであった。組織にこだわった人々は、単純に強固な組織がなかったからだ、と考え組織を強固にするための原理を個人の主体性の確立に求めた。

戦術にこだわった人々は、結局、安保闘争も、民主主義闘争であり、ある種の改良闘争であったこと、従って、改良闘争を闘い、発展させる戦術(小戦術)だけでなく、そ

それを革命闘争へと発展させるための戦術（大戦術）が新左翼に欠けていたと考えるようになった。

『生協企画66』6号で展開されている社会変革論にはこのような背景があった。

（ロ）改良と革命

改良と革命について考察するに当たり、『生協企画66』6号はまず生協内部の矛盾を確認することからはじめている。それは、組合員、専従、従業員の三者の利害の対立であり、組合員は安価な商品を求め、専従は事業の発展を求め、従業員は人件費の拡大を要求する、というのである。そして、この利害を異にする三者が合議制と公開の原則のもとに相互妥協をはかるところに生協運動があるが、しかし、生協運動の発展はこの内部矛盾を解消するものではなく、かえってその矛盾を拡大、深化させることとなる。このことを確認したうえで次のように述べている。

「（2）改良闘争は、社会の個々の現象として出て来た矛盾を、それ自身として解決しようとする。個々の部分的な特殊な矛盾を本質とは関係なく、それ自身として解決しようとする。これは、資本主義社会の本質的矛盾を解決するものではないから、本質的に解決出来ない事を解決しようとすることは、それ自身、自己矛盾であり、解決不能なジレンマである。

然し、この解決不能なジレンマであるにもかかわらず、現実の労働者や、消費者は、それでもこの部分的な、個々の特殊な要求にもとづいて改良闘争を展開する。それが本質的には解決不能なジレンマであることを知っていても、知らなくとも、現実の要求にもとづき、部分的な個々の問題の解決を、それ自身闘わねばならないのである。

（3）革命闘争は、社会の個々の現象として出て来る矛盾を、それ自身解決しようとはしない。個々の部分的な、特殊な矛盾を資本主義社会の本質的な矛盾との関係で把握し、個々の闘争を、個々の闘争としてではなく、この資本主義社会の矛盾の本質との関係で闘わねばならぬことを主張する。

然し、資本主義の運動がつづいているかぎり、労働者は経済的に政治的に、社会的に、生活において、意識において、現実には資本の運動（矛盾）の中にまきこまれており、資本の運動と同じく、矛盾にみち、矛盾を拡大する事によってしか、自己の主張を展開することは出来ない。

革命闘争は、この現実の解決不能なジレンマのもとにおかれている労働者を、全体的な、より本質的な矛盾の解決のために、引き上げようとする。革命闘争は、資本主義の自己崩壊として現れる恐怖や、戦争の中で労働者が、資本とともに自壊しない様に、常に資本主義の本質的な矛盾との関係で、改良闘争、又は階級とかかわりあう。

だから革命闘争は、改良闘争とは本質的に質的にちがった闘いであり、矛盾をはらんでいる。革命闘争は、改良闘争がそれ自身資本主義的であるにもかかわらず、一方において、この改良闘争の成功にむけて指導し、闘わねばならぬ、そして又、他方において、この改良闘争を否定しつづけなければならないのである。革命闘争は、具体的な最も現実的な諸要求にもとづいた闘いをそれ自身徹底しなければならないと同時に、資本主義

との本質的な闘いである権力闘争を闘わねばならない。」（28～9頁）

ここで述べられている運動論を整理してみよう。まず生協運動は消費者運動として、改良的課題を解決しようとするが、その内部にある資本主義社会の本質的矛盾を解決することはできない。それ故、改良闘争とは別に、資本主義社会の本質的矛盾を解決するための資本主義を打倒する革命闘争を準備しなければならない。そしてこの革命闘争を準備していく、という立場から改良闘争を闘うべきで、改良闘争が革命闘争に転化することはありえない。

第一世代の社会変革論はこのようなものであった。協同組合運動は改良闘争に分類され、革命闘争はそれとは全く別の闘いとされていたから、それは社会変革の担い手とは見なされてはいなかった。

協同組合が運動として社会的に意義のある課題に取り組もうとすれば、事業体としては否定される、という見解は、このような社会変革論の帰結であった。

第3章 第二世代の登場

1) 第一世代の遺産

67年10月8日、羽田現地闘争での山崎君の官憲による虐殺が70年安保闘争の幕開けだった。

60年安保闘争は、安保阻止国民共闘会議が労働組合の全国組織であった総評を軸に形成され、闘争日程などを決めていた。街頭でのデモで過激な戦術をとっていた全学連も、この会議と共闘していた。ストライキやデモへの参加も、末端組織での討論と民主的手続きによって決定されていた。

安保闘争以降10年運動の構造はすっかり変わっていた。総評はもはや組織をあげて政治運動に取り組むことはできなくなっていた。運動参加を望む人たちは、それぞれグループをつくり、反戦青年委員会に加わって、労働組合などの大衆組織とは独自に行動した。

大衆組織が反政府運動の基礎組織として十分機能しなくなったため、意志ある人々は行動委員会を結成して運動に参加したのである。この行動委員会の原理は、70年闘争の裾野を形成したベ平連に端を発していた。

この地域で形成されつつある行動委員会をソビエトの萌芽として捉え、これを拡大していくことを通して、革命闘争を準備する大戦術を具体化しようとする試みが始まった。

10.8以降の反戦、全共斗運動の昂揚の過程で、警察機動隊の規制をはね返す闘争が次々と進展し、地区ソビエトの形成、武装蜂起の準備、人民の武装といったテーマが熱っぽく語られた。しかし、69年に入ると、国家権力の巻き返しが始まり、大衆闘争は再び機動隊の手で規制されてしまう。

この時点で、大戦術に革命戦争が採用されることとなった。大衆運動がゆきづまった時点で、非合法軍事組織による革命戦争の開始によって、不利な情勢を切り開こうとし

たのであった。この試みも結局は失敗に終わる。

以上は第一世代の眼から見た70年闘争である。しかし、70年闘争はこのような内容にとどまるものではなかった。それは、以前と以降の運動の質的断絶を告げており70年闘争で形成された第二世代は、第一世代の思想と運動と断絶したところから出発して、自分達の世界を開こうとすることになる。

2) 第二世代の問題点

第二世代の種々の試みを述べることは筆者の手にあまる。ここでは千里山生協周辺に限定して問題を整理してみよう。

第一世代は革命戦争という大戦術に到るまでに分裂をくりかえし、かつ、その大戦術が敗北させられたことによって運動としてはその役割を終えた。ところが、第一世代は自分達の活動を総括し、第二世代にバトンを渡すことができなかつた。第一世代の政治思想はその運動が崩壊して以降も生き残ったのである。

その結果、現実政治の面ではニヒリズムがはびこる。というのも、第一世代の頭の中では、革命闘争が挫折し、その展望が全然見えないところで、改良闘争としての協同組合運動を担わなければならなかつたからである。「赤字は生協の勲章」という発言は、この第一世代の心境を正確に表現したものだだろう。しかし、事業を赤字にしたとて、本来の革命闘争の展望が与えられないとすれば、赤字は協同組合運動の志気をそぐだけである。ここは思い切って、第二世代にバトンを渡し、新しいセンスにかけて見るべきだったろう。第一世代は第二世代に学ぶべきであった。とはいえ、こうしたバトンタッチを妨げるほど、第一世代の思想的影響力がはびこっていたこともまた事実だったろう。

現時点で考えてみれば、第二世代は従来の思想と運動を否定してみせたが、新しい社会変革論を確立するところには進みえなかつた。だから、社会変革論に忠誠を誓っていた第一世代とは議論はかみ合わなかつた。というより、第二世代は第一世代の社会変革論を、違和感があったものの受け入れる他はなかつた。

そこで、先まわりして第三世代の登場の意義について述べよう。第三世代の登場は、第二世代によって新しく始められた試みを拡大、発展させることによって、社会変革論をまとめあげるための運動経験をつくりあげてきた。

第一世代も第二世代も、第三世代と結合し、新たな運動を構築するという共通経験を通してそれぞれの過去の社会変革論を考え直すことが可能となったのである。

第4章 第三世代の自立にむけて

1) 第三世代の特徴

第三世代は恐らく協同組合によって世代形成されたのだろう。第二世代の色々な試みに加わってきた新しい世代は、その経済感覚で自らの新しさを示した。

第一世代も第二世代も、運動はボランティアとして取り組むべきものと考えていた。第一世代の大衆は、生活のなかに運動があった。労働する現場で職場闘争をし、そして、労働組合が指導する政治運動に職場ぐるみで参加した。

第二世代となると労働現場での運動は望み薄となり、個人の判断で、種々の運動団体に参加しなければならなかつた。その結果、逆に運動領域は拡大していった。労働問題や議会でとりあげられている政治問題だけでなく、あらゆる社会問題が運動の種となった。障害者、女性、在日外国人、らマイノリティの運動が政治の前面に登場した。反公害闘争、有機農業運動、各地の住民運動、市民運動も第二世代の運動だった。このように第二世代の運動領域は多様化した。しかし、新たな社会変革論を打ち立てるところまでは進みえず、第一世代のそれを借りていた。

第三世代は運動を事業として起こすことを実践しはじめた。ボランティアは彼らにとっては奇妙だった。生協の存在が、運動の事業化を支えることとなった。第三セクター、市民事業、こういった考え方が広まってきた。第三世代は協同組合によって形成され、そして協同組合運動に新しい波をつくりだしたのである。

2) 第三世代の主張

第三世代は第一世代や第二世代のように、政治問題に関心をもっていない。それよりも、ライフスタイルを変えることが重要だと考えている。環境問題の解決が最も重要だという認識があるから、ライフスタイルの変革が決定的だとされるのである。

そのためには色々な活動があるが、しかし、どれも決め手に欠けることがわかっている。そうだとすれば、ボランティアでは続くはずがなく、運動を事業として継続し、長期に持続させることを通して、局面を切り開きたいのだ。

第三世代に代わって発言するのはこれ位にしておこう。重要なことは、社会的に意義のある運動が事業としても成立する時代を彼らがつくり出したということである。

3) 第三世代に学ぶ

第一、第二世代のある者は、社会変革のための政治革命のプログラムを極限にまで描き切り、実践し、敗れ去った。再び同じことをくりかえす必要があるのだろうか。

70年安保闘争はどのような意味で運動の質的变化を告げたのだろうか。それは、今日の社会では、プロレタリアート独裁の政治権力を樹立しようとする試みのはるか以前から、社会変革のための事業を開始することができる、ということではなからうか。

逆説的に言えば、プロレタリアート独裁が樹立されていないのに、プロレタリアート独裁がやらなければならないとされていた文化革命の事業に、いま、手をつけることができるのである。

というのも、資本主義は成熟し、その限界が見えてくることによって、次の社会を構想しようとするエネルギーを資本主義自体が生み出すようになったのである。

第一世代の社会変革論には、政治権力をどのようにして奪取するか、という戦術はあつ

たが、しかし、国家権力を掌握した後、どのようにして社会変革を進めるかについては、明確な政策を提起できてはいなかった。今日の社会で、社会変革をめざした運動が事業として成立しているとすれば、問われていたのは社会変革のための明確な政策を提起することだった。このことが出来なかった新・旧左翼が影響力を失ったのは必然的だった。

新しい社会変革論を構想しようとする場合、第一、第二世代の理論と経験を切り捨てるわけにはいかない。運動としては、随分変化してきているが、しかし、不断の連続の帰結としての変化である。社会変革をめざした運動を事業として成立させることを通してもう一つの社会変革論を一つの布陣にまで具体化させること、千里山生協が再生するとすれば、このような作業を通してであろう。

(後記)

大胆に思うところを書いてみました。討論の素材として役立つことを願っています。なお、世代については、同一人物が複数の世代に加わることも考慮して下さい。